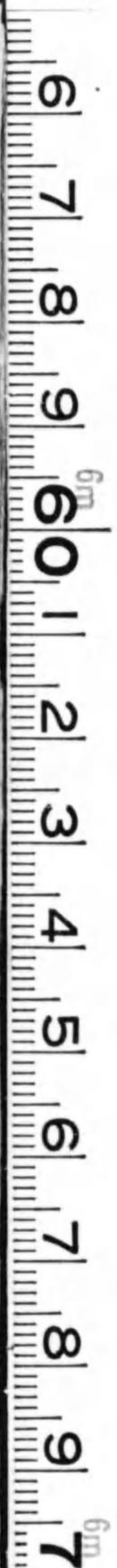


聖書より見たる日本

中田重治著



始



159

特 232
29



中田重治著

聖書より見たる日本

きよめ教會出版部發行



緒言

予は純福音の名を以て今も變らず主張して居るところの教をば幾度か本に纏めて出版いたしたく希ふた事がある。しかし其度毎其を躊躇し遂に中止した。其理由の一は生れ附の拙文であるのと、なほ一は先輩が立派な本を出して居るので、何も事新しく自分の名を以て出す必要を認めないからである。されば今日に至るまで有名なる本を譯出したるのみで、予自らの著にかゝる本としては一も出版しなかつた。勿論同勞者達が予の説教を筆記して出版したるものがあるが、あれは予の著書ではない。どうも此點に關しては、我ながら可笑しく思ふほど予は臆病である。尤も予は過去三十有餘年の間曩には焰の舌といひ今はきよめの友といふ題で出して居る新聞には不文を顧みず執筆して來た。これも好んでやつて居るのでなく、福音の宣傳上止を得ずしてやつて居るのである。

しかし此度は事情止を得ず本書を出版したる次第である。これは予が二十九年前より神より與へられたる光をば近年一層明瞭にして戴いたから、殊に聖徒の携擧の時も間近くなつたから、何はともあれ、日出る國に於る民族の使命につきて、今の時代の人にも來らんとする時代の人にも言遺しておくべきものと信じて急いで出版したる次第である。

其内容は讀んで貰はなければ分らぬ。これは救はれたる日本人の立場から預言の光を以て見たる日本の事につきて記したるものであつて、他に類の無いものである。いづれ内外人から種々の批評が出る事であらふ。予は然らんことを望む者である。かくして日本と日本人の真相が世界の人に知れるならば實に福なる事である。

予は或人の如く自國を禮讚する餘り、何もかも最負目を以て見る事はせない。勿論附會の事は避るやうにした。何故なればこれは預言に關する事で、主の再臨につける重大なる事であるからである。予の主意は日本民族が主の再臨に關係がある民である

事、殊に其に伴ふユダヤ民族の恢復に親密なる關係ある事を見出したので、本書を著はす事になつたのである。

これに就ては英語で書かれた本の中に參考になるものとは一もなく、邦人の手で書かれたものは多少あるけれども、悉牽強附會のもので、民族的自負心の臭味あるものばかりで、此書もそれらと同視せられんかとの嫌あるものばかりである。されば予としては深く祈り、聖靈の御指導をひたすら仰いだのである。所説のうちには獨斷的なものもあり、研究中のものもある。予はたゞこれが端緒となりて、我民族が其使命を自覺する一助ともなるなれば、本書を著はしたる目的の一部を達する事となるのであるから、予は衷心より神に感謝するものである。

本書は予の著として出してあるけれども、實はこれも去る十一月二十三日より二十七日まで淀橋ホーリネス教會の催にかゝる聖會に於て講演したるものを、筆記して貰ふたものである。しかし責任上予の著としたのである。予の同勞者なる米田豊兒、

岡本文子姉および尾崎喬一兄等は非常の努力で筆記してくれたもので、同兄姉に厚く感謝するものである。また上記の聖會に出席せられたる人々は本書が普く天下に擴められたために、多額の金をば出版費にとて寄附して下さつた事に對し感謝せざるを得ない。願くは主の御導のもとに本書の目的が達せらるゝやう祈るものである。

昭和七年十二月

中田重治識

第七版を出版するに當りて

本書は幾度か版を重ねて随分我が國の各方面の人々に讀まれたるやうである。尙本書は英文と露西亞文に全譯されて世界の人々にも讀まれ、世界のあちこちから種々なる批評をも受けて居る。特にユダヤ人の一部には非常な感動を與へ或るユダヤ人の著書等にも本書より引照されて居る程である。

しかし本書は日本が國際聯盟を脱退し、滿洲帝國が建設される少し以前に書いたものにて、予は聖書の預言の光により必ず斯くなる、なほ將來黄色人種聯盟が出來て、日本はその指導に當るやうになると本書にも言つて居る處であるが、或る事は既に成就し、或る事は着々其成就に向つて進められつつある。されば予は尙其後聖書によりて示されたる事も多くあるので其等をも加へて本書を改訂し度く願うて居たが、予は其後永らく病床の人となつてゐたので其願望を果すことが出來ず、止むを得ず暫

く絶版になりたる儘、本書の出版を見合せてゐたが、今日の如く日本精神が勃興したる時に於て本書に對する出版の要求があちこちから起つて來て居るので、予は改訂の筆を加へずして（勿論途中で末卷に跋を入れてあるが）依然の儘にて茲に第七版を出版することとした。何卒不惡御諒承あらんこと冀ふ次第である。

昭和十三年十月二十日

中 田 重 治 識

目 次

第一章	神の攝理	………	一
	人の自由意志と神の豫定——一國の歴史及地理に於ける神の攝理——各國各民族各々神より賦けられし使命あり——我日本の地理と歴史に表はれたる神の攝理——最近日本の世界的進出と神の時		
第二章	不思議なる民	………	一四
	日本に關する預言——文明を消化吸収する民——繁殖力旺盛なる民——各國の危険視する民——軍事上に於ける優越——カイゼルの黃禍論——獨逸の東洋政策の失敗——世界は廻り持ち——世界のスフィンクス		
第三章	日本人の起源	………	二八
	人類の發祥地——人類の移動と東方憧憬——世界の諸民族——原始文明の祖スメル人——スメル人とヘテ人——ヘテ人とイスラエル——ヘテ人と日本人——言語學上の考察——日本人は雜種——熊野神社の由來		

第四章 過去に於ける猶太人と日本人との關係………四四

猶太人渡來の歴史的根據——融通の民の渡來——太秦(ウツマサ)姓と大酒神社
——風俗習慣上よりの日本人と猶太人の相似——琉球人と猶太人——〇〇の〇
〇に就て——佛國一考古學者の説——イスラエル二派の東方移住

第五章 天祐を蒙りし日本………五五

景教傳來と弘法大師と景教——景教前の基督教——トマスの東洋傳道——元寇
襲來と北條時宗の英斷——國運上又宗教上の危機に於ける天祐の勝利——天主
教の渡來と徳川幕府の禁令及其攝理——日露戦争と天祐

第六章 日本に於ける基督教運動に關する聖句………七六

日出る國に聖祭表はるゝ約束——日本に於ける主の御業——光は東より——ミ
ヅラホとミヅホの國——日本と其附近の島嶼に關する預言——聖書註釋家の偏
見と東の極に關する預言——五大強國と日の邑の預言

第七章 現今に於ける日猶關係………八七

我國より猶太人の集めらるゝ預言——英外相バルフォアの約束と猶太人の歸國——

第八章 日東よりの援助者………一〇六

——シオン運動と無花果樹の萌芽——世界の中心國民たる猶太人——日露戦争當
時のシーフ氏の援助——反猶太人運動と獨逸のヒトラー——世界の金權を握る
猶太人——猶太人に害を加へぬ日本

第九章 日出る所より登る天使………一一八

東より登る天使は日本——西へ發展する國民——四大人種と大和民族——日本
民族の四大民族に對しての使命——日本の軍備の役立つ時——黙示録の註釋に
就て——聖國を臨らせ給へとの祈禱

第十章 日本對諸國民………一三一

イスラエル人救済の爲に四大民族を抑制する民族——將來世界的大事件の起る
ユフラテ河附近——志賀重昂氏の先見の明——世界一の石油の産地——日本と

國際聯盟——來るべき世界大戦と日本の態度

第十一章 北の王と南の王との戦争……… 一四〇

主の再臨迄戦争はあるべき也——北の王と南の王とは何か——露西亞に關する
預言——日露不可侵條約と露西亞の南方進出——支那に關する預言——日本を
盟主とする亞細亞聯合軍と其使命——最後の世界大戦と大患難時代

第十二章 祭壇より出づる聲……… 一五五

馨ばしき香は祈禱の型——祭壇下の殉教者の叫——もの凄い祈禱——主の要求
し給ふ祈禱——香壇に香を盛れ——民に逆つて訴へる禱告——神の靈永く人と
争はじ——祈禱に答へての審判の執行

跋……… 一六四

聖書より見たる日本

第一章 神の攝理

人の自由意志と神の豫定——神の攝理を知る法——一國の歴史及び地理に於ける神の攝理——
——各國各民族各々神より賦けられし使命あり——萬物は神の爲也——主權者の爲に祈るべし
——政權を掌る者に警告す——民族の選擇と使命の自覺の必要——我日本の地理と歴史に表
はれたる神の攝理——最近日本の世界的進出と神の時と神の旨——攝理の按配は凡の民が神
を求むる爲め——我民族はキリストの再臨に關聯して使命あり——國民一人／＼の目醒むべ
き必要——少數の聖潔の群の些かなる奉仕と使命の自覺の必要

『それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は是天地の主なれば手にて造れる殿に住みたまはず、
かつ衆人に生命と氣息と萬物を予たまへば物に乏しきことなし、人の手にて事らるゝものに

非ず、またこの神は凡の民を一の血より造り、悉く地の全面に住はせ、豫じめ其時と住ところの界とを定めたまへり、此は人をして神を求めしめ彼等が或は揣摩うる事あらん爲なり、然ども神は我儕各人を離るゝこと遠からざる也』(使徒行傳第十七章二十四節より二十七節迄)

此聖書の言によりて見ると、初め全能の神は凡の民を一つの血より造り、これを地の全面に住はせ、豫じめ其時と住むところの界とを定め給ふたのである。

我等は人の自由意志を信ずると共に神の豫定をも信ずる。但し人の自由意志とは神の豫定の範圍内に於てのみ用ひらるゝもので、神の豫定を超えては働かぬ。一個人に對しても、一民族に對しても、或は又一國家に對しても、それ〴〵神の豫定の御計畫があり、攝理の御手がその上に伸ばされて居る。故に個人としても、團體としても、將また國民としても、此の神の御旨を辨へ知つて行動する事が最も大切な事で、それを悟らずに、唯成行に任せて事をなすならば必ず失敗に歸する。されば我等個人としても、我等が未だ此世に生れ來ぬ前より我等を知つて居給ふた神の我等に對する聖旨を

辨へて行動せねばならぬ。

一個人としても、一國家としても、その上にある神の攝理、御計畫或は聖旨を知るにはそれ〴〵方法がある。即ち聖書の教ふる所と神の攝理による境遇、及びその人或はその民族を指導する指導者の受けたる光によりて知るのである。この正しき道によらず、唯自己の頭腦より割出して事を行はゞ、兎角誤謬に陥り易い。されば是は大に警むべき事である。此点を注意せざれば萬事を最眞目に見て自惚に陥るやうになる。私は本講演を爲すに際し、些かもかゝる自惚や偏見に捕はるゝ處なきやう切に祈りつゝ之に當らんとするものである。

前記の聖書の言によりて我等は神が一つの血より全民族を造り、己れの旨に従つて之を各處に配置なし、豫め其時と住むところの界とを定め給ふた事を學んだが、人は皆此光を以て自國の歴史や地理を考へて見なければならぬ。一体一國の歴史は只偶然に出來たものではない。その民族なり國家なりを指導して居給ふ造主なる神の御指

導の下に生れ出でたものであることを知らねばならぬ。かく見る事が聖書の見方である。又その國の地理を調べる時にも、その民がその地を選んで住むに至つた事情を單に偶然に歸して終ふべきではない。神は其民族の爲に其時と住むところの界とを定め給ふた。されば凡を治めす神の見えざる御手が動いて指導し給ふたのだと見るべきである。我等が此愛する國土に生れたのも神の攝理の然らしめた所である。

扱て各國民は獨一の神によつて一の血より造られたものであるが、此神は凡の民族にそれくくなすべき使命を授けて居給ふのである。その使命を自覺した民は幸であるが、これに反して此神の聖旨を辨へずに、只自己の欲する儘に行動して居る民は實に氣の毒なもので、彼等は兎角過失をなすのである。されば前述の如く、聖書の教や攝理の境遇、竝に指導の立場にある偉大なる人物或は預言者によりて、その民族が如何なるものなりや、又其使命は如何等に就て知る事は實に大切なる事である。私は今世界の凡の民族に對する使命を一々列擧する事は出来ない。是は本講演の目的でもなく

又私に出来る事でもないが、唯神は此日本國民を今日まで如何に守り導き給ふたか、又今後如何に導き給ふであらふかといふ事を明かにするのが本講演の目的である。

さて前記の聖言より見れば、我國民も神の攝理の御手に握られてかくあるといふ事は否定出来ない。今更にコロサイ書一章十五節—十七節をみると、

『彼は人の見ることを得ざる神の狀にして萬の造れし物の先に生れし者なり、そは彼によりて萬物は造られたり、天に在るもの地上に在るもの人の見ることを得るもの見る事を得ざるもの、或は位ある者あるひは主たる者あるひは政を執るもの或は權威あるもの萬物かれに由りて造られたり、且その造られたるは彼が爲なり、彼は萬物より先にあり萬物かれに由て存つことを得るなり』

とある。是によれば一切の造られしものは何の爲に存在するか、明白に示してある。是を先の使徒行傳十七章の引照と照らし合せて見れば、更に深い意味を悟る事が出来る。即ち一個人は無論、一國の宰相たる者、或は凡て上にありて權を掌る者等一切の

者は皆彼の爲に造られたといふのである。されば我等は主権者の爲にも、その政治によつて王の王、君の君たる御方が崇めらるゝやうに祈る者である。一個人に於ても然らうであるが、一國の政治に於ても此神の聖旨のならん事を祈らねばならぬ。一國の政治家に冀ふ所の事は、此造主なる神の聖旨に合ふ政治を布かん事である。私は此事を政府要路の人々に警告したい。もし然らずして唯自己の満足を得んが爲に他は如何なつても構はぬ、唯自分さへよければよいといふ一種の帝國主義を以て自國の發展のみを計り、他をおしのけて行動するやうなる事があれば、神は必ず之を審判さ給ふに違ひない。然り、正義の神は決してかゝる者の跋扈を許し給はぬ。これ古來預言者達がその國に對して特に警告した事である。個人も國家も、其上にありて指導し給ふ神の御心に添うて行動しなければならぬ。之を知らずに我儘勝手な行動する者は遂に横暴なる事をなして世界の平和を紊し、神に逆ひ、遂に聖書に『義は國を高くし罪は民を辱しむ』とある如く、其民は恥を受けねばならなくなる。

聖書に個人的選擇に就て記してある所がある。

『それ神我儕をして其前に聖く疵なからしめん爲に世基を置かざりし先より我等をキリストの中に簡び、その意のまゝにイエスキリストに由て我儕を己の子と爲さん事を豫じめ定めたり』(以弗所書第一章四、五節)

此神の選擇を自覺して居る者は實に幸である。聖靈によりて救はれ潔められるならば、自惚ではなくして、眞に自分は神より選ばれて居る者である事を自覺するに至るのである。一民族としてもかくの如く、神の選擇を自覺する事が出来たならば大に幸なる事である。神が今迄我等を指導し給ふたといふ自覺をもつ民族は偉大なる民族といはざるを得ない。本講演の目的は我民族に此事を自覺せしめ、いかにもして愛する我同胞をして、此民族に與へられたる神の使命を辨ふるに至らしめたいといふにある。是が私の切なる願である。

却説、我日本は大陸から離れた島國であるから、今日に至る迄他の民族に征服せら

る、事なくして来た事は僥倖であるといふ者もあるが、我等聖書の光を以て見る者は斯る環境に我民族が置かれて、他國の侵略を受くる事がなかつた裏に、全能の神の御保護を認め、これ神が將來何事かをなさしめんと此民族に期待し、これに使命を授けて居給ふ故である事を思ひ、日本の地理を學ぶに際しても一種云ふ事の出来ない莊嚴の感を感じるのである。神は御攝理の中に此民を二千五百年間導き育て、居給ふたのである。

又歴史に於ても然うである。二千五百有余年皇統連綿として来たのは決して偶然ではない。我歴史をよく調べて見れば、其處に深い神の聖旨のあつた事を思はざるを得ない。過去に於て危険なりし事もないではなかつたが、何時も不思議に守られて、今日の強固なる國家の基礎を据えるに至つた事を思ひ浮ぶ時、何人も神の攝理の然らしめた事を否定し得まい。無神論者や物質論者、反宗教者の連中はこんな事を云へば笑ふであらうが、笑ふ者は笑へ、使徒行傳に凡の民に豫め時と住む所の界を定め給へ

りとする。即ち各民族が各其好みに従つて其地に住むに至つたものではなく、これは神の配置で、神が各國の境界線を定め給ふたのである。神の御言こそは我等にとつて最もよき解釋を與へるものである。偶然とは物質論者や神を知らぬ者のいふ事である。

此處に先づ神は各民族の爲に時をも定めて居給ふとある。私は曾ては我日本が千年も前に世界の表に顔を出してゐたらば、今頃は大した國家になつてゐたのにと残念がつた事もあり、せめても三百年前に目醒めて居たらばと思つた事もあるが、今はさうでない事が解つた。神が深い聖旨の中に定め給ふた時があつたのである。我國は今から七十年前より漸く歐米人と交際する様になつたばかりであるが、今日に至りて世界の檜舞臺に活躍する程の隆盛を見るやうになつたのは、誰かが云ふ如くに、何某の外交よろしきを得た結果でもなく、又は軍人達の策戦が當つた爲でもない。神の定め給ふた時に及んで此處に至つたのである。即ち攝理の手によつて世界の表におし出され

たのである。何れの國民にしても此の神の定め給ふた時至らぬに、無暗に世界の表に顔を出さうと思ふべきでない。傳道書には「凡の事に時あり」とある如く、萬事に神の定め給ふた時がある。一國の興亡盛衰には皆それ／＼時がある。神の許なくしては一羽の雀すら空しくは地に落ちないとある。一國民が東西南北に無暗に手を延ばして他國を征服せんとしても、神の許なくしては出来ぬ。然るにそれを思はず、神の許なくして徒らに一種の帝國主義又は所謂軍國主義の如きものを以て無暗に手を延ばすのであれば、神はこれを抑壓し給ふに相違ない。然しこれに反して神の聖旨を辨へ、之に服して行動するのであれば、必ずや神の祝福を受け、何人と雖も又何國民と雖も之を妨ぐる事は出来ない。我等は此事を思ふて此際我國の爲に大に祈らねばならぬ。徒らに自ら事件を惹起すのでなく、神が我民族に何をなさしめんとし給ふか、其大使命を明かに示さるゝやう祈り求むべきである。

然らば神が時と界とを定め給ふたのは何の爲であるかといふに、前記使徒行傳の其次の節にいつてあるやうに「此は人をして神を求めしめ、彼等が或は揣摩うる事あらんが爲」である。凡の民族は皆此神を探る處迄行かねばならぬ。かのナポレオンは何が故に亡んだか。彼が余りに自己を信賴しすぎ、神に榮を歸せなかつた爲であつた。而も我等がさぐり求むべき神とは普通に云ふ神ではなく、提多書二章十一節―十三節に『夫すべての人に救を賜ふ神の恩あらはれ、我儕を誡め我儕をして神を敬はざる事と世の中の慾を棄て、自ら制し正しく且度みて今世に存へ、望所の福と大なる神すなはち我儕の救主イエスキリストの榮の顯はれん事を望待たしむ』とある如く、再臨のキリストである。即ち天地の造主なる神の存在を知り得た事を以て満足せず、諸の民族が目醒めて大なる神即ち主イエスキリストを待ち、而も其來臨を早めんが爲に、無意識にもせよ有意識にもせよ、其爲に盡す所があれば大なる幸福である。私が本講演に於て説かんとして居る結論を豫じめいへば、我日本民族は主イエスの再臨と其に關聯するイスラエルの恢復に關して使命があるといふ事である。神

は我國民に大なる使命を與へてゐ給ふ。勿論日本國民だけが獨り使命を擔つて居るといふのではなく、他の國民もそれ／＼神の御思召によりてなすべき事が定められて居るには違ひないが、其は今私のいふべき所ではない。

聖書の中には惡魔の手先に使はれる惡役をなす民もある事が記してある、イスラエルの懲しむる杖として特に神のたて給ふた民族があつた事も録されて居る。然し私の調べた所によれば、我日本國民は世界の平和を亂すやうな者としては録されて居らぬ。かくあつて欲しい。却て神は今後攝理の中に此國民を大に用ひんとしてゐ給ふ事を知るのである。

然らば民族全体に使命が與へられて居るとしても、自分如きは關係がないとして等閑に附して置いてよいかといふに、民族全体に與へられた使命を果すには、國民一人一人が目醒めなければならぬ。無論民族全体が此事の爲に目さむる事を望むが、その前に寶血を以て贖はれた此國の聖徒達がこの使命の爲に一致結合、蹶起せられん事を

願ふものである。歴史を見れば古來國家はその國民の大多數によりて動かされず、其國なり民族なりの使命を自覺した少數の人々によりて率ゐられて來たのである。イギリスを十八世紀の腐敗と墮落より救出したものは彼のウエスレーの起したメソヂストの群であつた。是を思ふ時、我等は日本に於ける少數の者であるが、此民族に與へられし大使命に醒めて、其使命を果し得るやう、切に祈らねばならぬ。

今切に主の再臨を翹望しつゝイスラエル回復の爲に祈り盡して居るものは、我國の全人口から云へば目にも止らぬ程の少數の聖潔派であるが、我等がなして居る事は冷やかなる水一杯を與へるやうな事に過ぎぬが、これがやがて全日本に神の祝福をよび下す事となる事を思ふて感謝に満ちて居る。

我等は他の者の有たぬ再臨の光を與へられ、他の者の知らぬ智識をもつ事を許され、他の者に愈りて特別の使命を賦けられた事を感謝せねばならぬ。此時代に此國に生れた事は神の攝理の中にあつて偶然の事でない。何卒各自使命を自覺して大に祈りたい。

第二章 不思議なる民

東より登る天使——日本に關する預言——お伽話的存在なりし日本——文明を消化吸収する不思議なる民——偉大なるは體格よりも頭腦——繁殖力旺盛なる民——各國の危險視する民——軍事上に於ける優越——日清日露兩戰役に於ける大勝——カイゼルの黃禍論——獨逸の東洋政策と其失敗——白人優越感保持の苦心——世界は廻り持ち——文明、傳道、金融に於て——世界のスフィンクス——必ずしも二千五百年の歴史の故に非ず——宣教歴史に於ける異數の進歩——ホーリネス人の自覺を促す

『此後われ四人の天使地の四隅に立ちて地の四方の風を援とめ、地の上にも海の上にも樹の上にも風を吹かせざるを見たり、又此の他に一人の天使活る神の印を持ちて東より登り來るを見たり、此使者かの地と海を傷ふ事を許されたる四人の使者に向ひて大聲に呼はり、我儕の神の額の額に我儕が印するまでは地をも海をも樹をも傷ふ可らず』(默示録第七章一)

節より三節

此「東より登り來る天使」とは日本國民を指すとは、私が屢説いて來た事である。「東」とは希臘語でアナトリーといふ言で、日出づる所といふ意味である。是は日本を指すのではなからうかとは余程以前から考へて來たが、是は確に日本に關する預言であるといふは明言する。將來此預言が必ず實現する。然し今は先づ演繹的でなく、歸納的に日本國民が不思議なる國民である事を説く事にする。

我日本民族が世界の舞臺に表はれ出たのは、僅か六七十年前からに過ぎぬ。日清戰爭後私は米國に行つた時、米國人より日本は支那の一部かとか、支那より獨立したかとかいふ事を、而も書物を読んで居る人からさへ眞面目に問はれて、こうも無智識かと驚いた事である。支那に就ては聖書の中の以賽亞書にシニムとして名の出で居る位で、余程舊くから世に知られて居たが、日本に就ては一向世に知られて居なかつた。支那の元の時代にマルコポーロといふ人が日本の事を調査し、本國に歸つてから東方

に支那の近くに日本といふ國があつて、黄金が砂利のやうに腐る程あるなどと傳へたものである。其後のアメリカを發見したコロンブスは實は此日本を探しに來たのだといふ説がある。彼はアフリカの喜望峰を廻つて日本に來るには余りに遠いから、東へくへ行くと代りに西へくに向つて憧憬の國を目指して冒險的航海を企てたのだといふ。(此コロンブスが猶太人であつた事は注意すべき事である)。此傳説の眞偽は兎もあれ、かく日本は三百年前迄は佛話的存在に過ぎなかつたが、漸くにして七十年前より世に出たのである。

初は日本人は物真似が上手だからとて、東洋の猿だといはれた程であるが、次第に不思議なる民たる事を認めらるるに至つた。それは日本人は西洋各國の思想なり文明なり、何でも之を取つて自家薬籠中のものにする力があるといふ事を世界の人々が知つたからである。我等は自惚でこんな事をいふのでない。事實世界の人々が驚異の眼を見張つて日本人を見、筆に口に其事をいつて居るのである。一体如何なる人民でも文

明に接觸すれば進歩するのかといへば、必ずしも然うとはいへぬ。アフリカ人は五百年前、即ち十五世紀の初よりポルトガルを始めとして歐洲の文明に觸れたが、少しも進歩して居らぬ。印度にしても支那にしても、我等日本人より遙かに早くより西洋文明に接して來たが、其割に進歩して居らぬ。彼等は文明を咀嚼するに至らなかつたのである。然るに我日本人に至つては、一度文明に接するや其を消化吸収する事に於て確かに驚くべきものがある。是は自惚をいふのではなく、事實である。

然らば我々日本人が體格に於て立派なのかといへば、如何に最負目に見ても然うはいへぬ。外國を旅行する時、我々日本人の體格の貧弱な事には實際情なく感ずる。然し體格がよいから、身長が高いからとて優生學上優秀の人種だとはいへぬ。南米の方なるバタゴニヤに行くと、女でも六尺以下の者は居ないといふ程の大きな體格を所持して居るが、體格はよく骨格は立派でも智識に欠けて居り、現にかの民は段々衰微しつつある。又先年私はニューゼーランドのマオリ人の所に招かれて行つた事がある

が、此マオリ人も今尙偉大なる體格をもつて居るが、昔は身長が八尺もあつたといふ。然し偉大なる體格の所有者が必ずしも偉大なる人種又は人物ではない。體格よりも頭腦によりて偉大であるか否かが決定する。日本人が歐米人に比して體格矮小である事は争へないが、此體格に於て貧弱なる我日本人が今や世界の表に出て、智識に於ても技藝に於ても、殊に軍事上に於て少しもひけを取らずに、堂々と世界の人を相手にして一歩も譲らず、グン／＼やつて行つて居るのは實に驚くべきものではないか。確に之は不思議な人民であるといつても過言ではあるまい。嘗に歐米人がかくいふからでなく、日本人自身此事を認めて居るのである。

更に又繁殖力の旺盛なる点に於ても、日本人は猶太人や獨逸人と共に世界中屈指の人種である。元來民族の盛衰は其繁殖力の強弱と正比例するもので、繁殖力の盛なる民族は必ず盛んになり、繁殖力が衰へると其國民は衰へる。此意味からいつても産兒制限など以ての外である。今猶太人の事をいつたから序にいへば、猶太人は

身長も日本人と同じ位の、風采も上らぬ人種であるが、繁殖力の旺盛なるのみならず、又驚くべき頭腦の持主である。今日世界第一の富豪は猶太人であるが、更に學者、思想家、美術家等皆世界第一の者を輩出して居る。日本に於ては世界的發明家などないではないが、大なる學者、大なる思想家等は今後に見るべきである。無論思想學術界に随分立派な人も出て居るが、未だ世界的に充分と迄は行つて居ない。然し現に世界の表に出て、世界の人と堂々拮抗して行くだけの素質を有して居る事は明白である。唯意志が強いとか、我慢強いといふだけではない。實際一歩も譲らずにやつて居るのである。近頃の外交上の事を見ても然うではないか。世界の人を相手に堂々と争つて居る。唯鼻息が強いといふだけではない。我等は之を國民的自負心から誇るのではなく、世界の人々が等しく驚異の眼を以て見張つて居る故、斯くいふのである。今迄は世界の人々は日本人を賤しめて排斥したものであるが、今日に於ては此人種は驚くべき人種であるとして底氣味悪く感じ、之を危険視して排斥するやうになつた。

米國に於ける排日にしても然うである。斯る人種にドシ／＼入られては國の將來が危ぶまれるといふ懸念から起つた事である事は確かである。オーストラリヤでも排斥せられて居るが、勞働賃銀が安いからとて排斥したのは昔の事で、今は此民は立派な頭腦の持主で、其技量に於て到底對抗出来ぬといふ處から、日本の勞働者の入國を拒ぐやうになつたのである。日本は年々歳々進歩して行くので、各國は油斷して居られぬと警戒するやうになつたのである。

軍事上に於ても然うである。支那との戦争の時に、世界の人々は支那は大國である故屹度日本が敗られるに違ひないと思つて居たが、豈圖らんや大國支那が敗れて日本が大勝利を博した。然し是は黄色人種同志の争であつたからで、如何に日本強しと雖も白色人には敵ふべくもあるまいと、高をくゝつて居た處、次の日露戦争に於て露西亞に對しても大勝利を得たので、日本侮る可らずと世界の人から驚異と恐怖の眼を以て見られ出した。初め獨逸のカイザルは露西亞のザーの尻をつゝいて黄色人種

恐るべし決して油斷はならぬぞと、頻りに黃禍論を唱へて露西亞が西に向けて居た顔を東に向き轉へさせ、其間にカイザルは歐洲大戰の準備をして居たのであるが、日露戦争に於て露西亞が負けて果して日本は尋常一様の民族でない事が世界に證據立てられて來たので、何とかして其日本を壓へつけたいと思ふものゝ、獨逸には東洋に於て根據地をもつて居らぬ、然し何とかして之に對して備へねばならぬと思つて居た矢先、支那に於て獨逸の宣教師が殺されたのを機會に、之によき口實を得て有無を言はず膠州灣を占領して終つたのである。これは支那に對する復讐といふよりも、實は日本に對して備へんが爲に外ならなかつたのである。更に太平洋中の彈丸黒子の島を手に入れて其處に根據を据えたのも亦此目的の爲であつた。然るに何たる神の配劑ぞ、獨逸は歐洲大戰の結果あのやうな敗北をなし、日本は折角獨逸が占領した青島を占領して膠州灣を受け嗣ぐ事になつた。米國も愈々日本人恐るべしと考へるやうになり、日本に對して何とかせねばならぬやうに思ふに至つた。其處へ先に獨逸が露西亞の後押

をした如く、今や英國が米國をついて日本に對して何とか嘴を入れさせて居る。其煽動に乗つてスチムソンが大平洋に艦隊を廻して演習をしたりなどして居るのである。

然らば何が故にかくも世界各国の白人種が何とかして黄色人種の代表ともいふべき日本を壓へつけようとするのか。是れ彼等が抱いて居る白人優越主義 (White Superiority) を敗られまいとの努力に外ならないのである。然し神は世界の人を平等に愛し給ふ。神に依怙最負はない。色が白からうが黒からうが乃至は黄ばんで居らうが、神はそんな事によりて區別し給はぬ。世界は廻り持である。昔は埃及やバビロン等の如き黒色人種から文明が生れ、次に白色人種が其を受嗣いで來たが、今や銀色人種ならぬ黄金色人種が榮ゆる順番であるかも知れぬ。傳道に於ても同様で、初はエテオピア人の如き黒色人種が用ひられ、次に白色人種によりて福音が宣傳へられたが、神は今や黄色人種に使命を賦けて用ひんとして居給ふと思はれる。強ち黄色人種が偉い

からではなく、萬物を支配し給ふ神が崇められ給はんが爲に、今や黄色人種の上に神の御手が置かれてあるのである。世界の金融の中心にしても亦西へくと移つて行き、歐洲大陸から倫敦に移り、其より紐育に移つたが、今度は東京か上海に移るかも知れず、遂にはいづれにしてもエルサレムに移つて行くのである。萬事は然らういふ風になつて居るのである。神は今や黄色人種を用ひんとして居給ふ。素質がよいからといふよりも、神の深き攝理の中にかく運ばれて居る事を知らねばならぬ。今世界の金融を掌握して世界の金融の中心となつて居る猶太人は今や安全地帯を求めて諸方に移動して居るが、段々東洋に移りかけて來て居るのは、我等が大に注意を拂ふべき事である。既にビルマ、香港、上海等には多くの猶太人を見かけるやうになつた。彼等が更に日本に渡つて來るか否かは解らぬが、聖書のゼカリヤ書八章七節には、世の終に猶太人がエルサレムに集めらるる時には「日の出る國より」も集めらるゝと預言してある。今日本には猶太人は千人位しか居らぬが、其千人の爲に二千五百年も前に此預

言が書かれたとは思はれぬ。世界には千六百万人も居るが、今後彼等の中多の者が日本にも来るであらう事を豫想せられる。然らば我國は彼等猶太人に取つても重大なる關係ある國であるかも知れぬ。

今迄私は日本人が不思議なる人民である事を種々なる方面から説いた。次章に於ては更に日本人が人類學的に特別の人種である事を見たいが、聖書的に見ても是は特殊の地位にある民族である。日本人は世界の人に一種のスピリクス、即ち一種の謎として見られて居るが、聖書の上より見れば決して謎の民ではない。日本人は今世界の舞臺に大活躍をなし、世界の人が奇異の目を注いで居るが、私は日本人は當然かくあるべき筈のもので、當然行くべき道を進んで居るに過ぎぬと思つて居る。

日本民族は不思議な民族であるといふと、國學者等は直様我日本は二千五百年間の歴史があるからといふが、我等は斯る事からいふのではない。年月の長短で國民の優劣を定める譯には行かぬ。國の舊いといふ事に於ては他にも舊い國がある。先頃日本

にアフリカのエテオピア即ちアビシニヤ國から使節が來られ、我國と通商條約を結ぶやうになつたが、此國の如きはソロモンの時より王統連續綿實に三千年にも及んで居るといふ舊い國である。近頃英國皇室の系圖を細々と調べ、昔エレミヤがヒゼキヤの娘を連れて埃及に行つたのが起原で、アイルランドの酋長が之を娶り、其血を受けた者がスコットランド王で、現英國皇帝は其血統であるから遠くダビデの血をひいた者であるとして、三千年の系統を辿つて論ずる者もあるが、ダビデの血を受けて居るとして何も誇るに當らない。我等は唯我國が二千五百年續いた故に不思議な國民であるといふのではない。過去に於て神の御指導がいかに豊に我國の上にあつたかを思ひ、更に今後世界の舞臺にいかに活躍するかを預言の光を以て見て、我日本民族は不思議なる民であるといふのである。

細かくいへばいふべき事が多くあるが、我國の基督教の傳道史を繙いて見ても、基督教が傳はつてより六十年、其進歩の著しい事世界に其比を見ないといはれて居る。

我等は寧ろ其遅々として振はぬ事を歎くのみであるが、それでも世界の他の國と比較すれば異数の進歩であるとの事である。例へば米國の同胞間に於ても、日本人が二百或は三百と集つて居る處には必ず教會が出来て居る。是は支那人やメキシコ人其他歐羅巴人の到底眞似の出来ぬ事である。誰か日本人を無宗教國民といふや。此意味からいへば日本人は極めて宗教的人種であるといつても差支ない。内地の傳道に於ても短日月の間に大に進歩したと、傳道會社の人は驚いて居る。是は世界の宣教歴史に於ても稀な事であるといふ。もし我ホーリネス教會の事をいはゞ笑はれるであらうが、教會組織が漸く十三年前の事であり、五年前から獨立自給して今日に至つた事は、其進歩の速かなる事驚くべき教派であるとして、各教會は驚異の眼を以て見張つて居るのである。五年前獨立自給を宣言した時人々は驚いたが、いかにしてかくまで長足の進歩をしたかと人々に不思議に思はれて居る。先年アメリカに於ても其秘密は何かと問はれた事もあるが、無論神の恵と導による事ではあるが、我教會がかく祝福を受け

たのは、日本人に特別の使命があり、今後神は此日本を用ひて御自身の經綸を成遂げんとして居給ふ一の證據であるといふを憚らぬ。日本人が他の民族と異つて偉いからといふのでなく、日本人には特別に使命がある故其爲す事に祝福が加はるのである。私は民族的傲慢からかゝる事をいふのではなく、神がかく導いて居給ふ事を信ずる者である。我等は斯る國民である事を自覺せねばならぬ。我等キリストの再臨を待つ聖徒たる者は特別の使命を有する事を自覺して自重し、神が此民を用ひて其聖旨をなさんとし給ふ大御心のある事を知り、我等はこんな恵まれ方では足りない、更に更に大に恵まれねばならぬ、我等の恵まるゝと否とは世界教化に大關係ある事を思ふて大に恵を受け、神を満足させ奉る者とならねばならぬ。

第三章 日本人の起原

人類の發祥地——人類移動の原因——氣候の變化、食物の要求、寶石探求の爲め——東方憧憬——高原より平原へ——バベルの塔倒壊と人民の離散——世界の諸民族——セム種、ハム種、ヤベテ種——原始文明の祖スメル人——スメル人と密接の關係あるヘテ人——考古學の發見による高等批評家の敗北——ヘテ人とイスラエルとの關係——ヘテ人と日本人との身體上の類似——ヘテ人と日本人との關係の言語學上の考察——日本の元住民族アイヌ——日本人は雜種——縮れ毛によりて判斷せらるゝ日本人と猶太人との關係——日本に雜多の民族の入込みし理由——「羊」なる言に就ての日本人の起原考察——熊野神社の名と由來に就ての日本人とヘテ人との關係考察

『全地は一の言語一の音のみなりき、茲に人衆東に移りてシナルの地に平野を得て其處に居住り、彼等互に云けるは去來軛石を作り之を善く熱んと、遂に石の代りに軛石を獲灰沙の代

りに石漆を獲たり、又曰けるは去來邑と塔とを建て其塔の頂を天にいたらしめん、斯して我等名をあげて全地の表に散ることを免れんと、エホバ降臨りて彼人衆の建る邑と塔とを觀たまへり、エホバ言たまひけるは觀よ民は一にして皆一の言語を用ふ、今既に此を爲し始めたり、然ば凡て其爲んと圖維る事は禁止め得られざるべし、去來我等降り彼處にて彼等の言語を淆し互に言語を通ずる事を得ざらしめんと、エホバ遂に彼等を彼處より全地の表に散したまひければ彼等邑を建る事を罷めたり、是故に其名はバベル(淆亂)と呼ばる、是はエホバ彼處に全地の言語を淆したまひしに由りてなり、彼處よりエホバ彼等を全地の表に散らしたまへり』(創世記十一章一節より九節)

人類の發祥地に關しては古來様々の説があるが、亞細亞、歐羅巴、亞弗利加三大陸を結ぶ中心の邊りのユフラテ川の上流であつたらうといふ事に大概一致して居る。エデンの園も其邊であつたと思はれる。聖書によればノアの洪水により全世界は一掃されて、ノアの子孫より凡ての人種が分れ出でたとあるが、ノアの方舟の止つたアララ

テ山は小アジアの東北アルメニヤにある。此處が新人類の發祥地で、人類學者によれば原始人は其處から東方ペルシヤにかけての高原に居たらうとの事である。

更に人類が其處より如何にして全世界に擴がるに至つたかといふ事に就ては、學者等の説に従へば、第一には氣候の變化に伴ふて、即ち或は涼しい處、或は暖い處を求めて移動したものだといはれて居る。例へば私は先達て北海道の日高のアイヌ部落に巡廻したが、彼處は冬にも雪が四五寸しか積らぬ暖い處である故、成程アイヌ人等が彼處に集まるやうになつた筈だと思つた事である。次には食物の要求に應じて、即ち或は海の物が欲しいとか、或は山の物を食したいといふ要求から移動したといふ説も尤もな事である。更に又寶石を探し求めて移動したものもある。例へばカルフォルニア洲の如き、彼處には金山があるが、初め彼處にある金の採掘に人々が集まつたのが、今日かの洲の盛大を致した原因であるといはれて居る。又アフリカに於ても、ダイヤモンドを探す爲にトランスバール等に集り、其處に殖民地が出来た事實が

ある。私が先年ニューゼーランドのマオリ人の處に行つた時、堅固なる事に於てダイヤモンドに次ぐといはるゝ翡翠に似た寶石を記念に貰つたが、此石はニューゼーランドの海の外見出し得ないものであるとの事で、マオリ人が六七百年前の昔、南洋から何十日も航海してニューゼーランドに移つたのは、此石が欲しさに其處に行つたものであるといふ。彼等は今も之を勾玉のやうなものに作つたり、はては彼等の守り神のやうなものを彫んだりして珍重して居る。斯る例を以ても、原始人等が物質的欲求を満たさんが爲に各處に移住するやうになつたといふ説も首肯せられる。

然し此處に更に一説がある。早稻田大學教授西村眞次氏の説く處で、一種神秘的であるが興味深く、大に傾聴すべき説である。其は東方憧憬といふ事で、凡て人類は太陽に對する一種の憧憬をもち、日の出づる處を憧がれて東へ／＼と移つて行つたといふのである。

前述の如く人類は最初ペルシヤ邊よりパミールの高原邊に住んで居たもので、其よ

り東へ〜と移つて行つた人種と西へ〜と移つて行つた人種とがある。日本では高天原といふ事をいふから、日本人も矢張最初は或高原地から下つた人種である事を想像するに難くない。其は兎もあれ、最初人種は或高原より東へ〜と降つたものと、西へ〜と降つたものとあり、其東へ〜と降つた者が東洋人で、西へ〜と降つた者が今の西洋人である。創世記十一章二節に「人衆東に移りてシナルの地に平野を得て其處に住めり」とある。此「東に」は英譯では「from the east」(東より)となつて居るが、是は日本譯の如く「東に」の方が正しい。一體山地は繁殖に不便で、山國に大都會は出来るものでない。日本の都市を見ても、東京、名古屋、大阪等皆繁華な都市は平原を扣えて居る。信州の如き山國に大都會が出来た例はない。人は皆自然に平野を求めて發展して行くのである。世界に於ても其如く、太古の民がシナルの地に平野を得て、其處に移り住んだといふのも亦其爲である。

聖書は人類の全世界への離散の原因をバベルの塔の記事に於て示して居る(創世記

十一章)。學者のいふ如く、氣候や食物の關係や、或は物質の欲求を満さんが爲め、又は東方憧憬の爲もあつたであらうが、聖書に従へば此處に人類移動の尙一の原因があつた。シナルの平野に住んだ太古の民が「シギ邑と塔とを建て其塔の頂を天にいたらしめん、斯して我等名を揚げて全地の表面に散る事を免れん」と、今の言でいへば文化や技藝を誇らんとした。上に伸びんとするは結構な事であるが、己が手の業を以て誇らんとした。殊に彼等は神が人類の始祖を祝福して「生めよ、繁殖よ、地に満ちよ」と宣ふた。即ち繁殖して全地に擴がるべき事を示し給ふたに拘らず、彼等は之に反して一ヶ處に集まつて居らうとした爲に、神は彼等の言語を亂して、其結果諸方に離散せざるを得ぬやうに仕向け給ふたのである。一體言語は思想を表はすものであり、方言は郷土を同する者同志の間に一種の情愛を繋ぐものであるが、言語が通じなくなつたといふのであるから、彼等が言語の通ずる同志が一團となつて分散するに至つたのは自然である。即ち神が散らし給ふたのである。自然に擴がつたのではなく、神

が擴がらせ給ふたのである。

されば日本國民に就ても、我民族が亞細亞の東隅の島國に住むやうになつたのも、偶然でもなければ、此民族が自ら求めて此處に來たのでもなく、凡の民族の上に加はつて居る神の攝理によるものであると思ふのが穩當な見方である。

却説、メソポタミヤの搖籃地より出發した人類が、かくして全世界に散るやうになつたのであるが、世界の人類は皆ノアの子セム、ハム、ヤベテより出たもので、現在世界の諸民族は皆此三人の後裔である。先づセム種とは普通猶太人やアラビヤ人等だといはれて居るが、聖書に従へば凡ての黄色人種がそれである。黄色人種中重なる日本人、支那人等も此セム種に屬する者である。次にハム種とは主に黒色人種で、埃及人の如く左程に黒くないのも居るが、其他アフリカ土人がそれである。ヤベテ種は所謂白哲人種で、歐羅巴や亞米利加の人々である。白哲人種といつてもスペイン人やホルトガル人の如く、隨分黒いのもある。米國のインデヤンはセムの流を汲んだ黄

色人種である。日本人も後には雜種になつたが本來はセム種である。亞細亞はセム種であるが、印度人は亞細亞に住んで居てもアリアン人種で、白哲人種に屬するものである。マレー人、支那人、滿洲人、西伯利亞在住のモンゴリア族、アメリカのインデアン等皆セム種である。

然るに此處にメソポタミヤに一の不思議なる人種があつた。スメル人と呼ばれて居る人種であるが、これが原始文明の祖となつたものではなからうかとさへいはれて居る。かの楔形文字は彼等の發明したものだといはれ、カルデヤ、バビロニヤの文明も彼等が中心となり、ヘブル人、フェニキヤ人も彼等の文明に負ふ所があつたとの事である。殊に此スメル人の美術は大に發達したものであつたと考古學者はいつて居る。一體世界の文明は最初はユーフラテ河畔に於て發達し、次には埃及のナイル河畔、更にギリシヤの方面へと發展して行つたものであるが、然らば此文明の魁となつたスメル人とは一體如何なる人種であるかといふ事は、頻りに研究せられて居るが、未だ

に判然としなない。唯歐羅巴人でない事は明白で、モンゴリア人の一種であつたらうといはれて居る。

「スメル」といふ言は平原といふ意味であるといふ人もあるが、此處で一寸附言して置きたいのは、日本語ではスメルといへば尊い事を意味する言で、スベル(統べる)、スメラギ(天皇)、スメラミコト(皇尊)等の語源と語呂が似て居るのは、研究すべき問題ではないかと思ふ。其は兎もあれ、此スメル人と密接の關係を有して居た者に、聖書に出て居るヘテ人といふのがある(創世記十章十節)。ヘテ人はハムの子孫で、スメル人とは非常なる關係ある事を人類學者はいつて居る。而して此ヘテ人の文明もスメル人の文明を受継いだものであらうと思はれる。従來高等批評家はヘテ人などいふ人種は存在したものでない、これは聖書の誤謬であるといつて來たものであるが、今日考古學上の發見によれば、小亞細亞に多くのヘテ人の住んで居た事、彼等の文學、歴史迄明かにせられ、其中には彼等が埃及へまでも攻寄せたといふ事實までも解つて

來て、此人種が驚くべき人種であつた事が明白になり、Hittite Empire (ヘテ帝國)といふものが存在して居た事も立證せらるゝに至つた。此ヘテ人とスメル人とは非常なる關係あり、或はヘテ人はスメル人の一部ではなかつたらうかとさへいはれて居る。

此ヘテ人はアブラハムの時代から居た人種で、アブラハムが其妻サラの死骸を葬るにヘテ人から墓地を買つた事が聖書に記してある(創世記廿三章)。此ヘテ人は戰爭に非常に強かつた人種で、ダビデの部下にウリアといふ將軍が居たが、此人はヘテ人であつた。此ウリアの戦死後ダビデは彼の妻を娶つたが、其間に出來たのがソロモンである。即ちソロモン王の母はヘブル人ではなく、此ヘテ人であつたのである。かくヘテ人はイスラエル人とは非常な密接の關係を有して居り、常にイスラエル人に屬して軍事を司つて居たものゝ如く、實に秀いでた人種であつた。

此ヘテ人が今より二千五百年前ユダヤ國の滅亡と共に如何なつたか解らなくなつて終つた。其故にヘテ人といふ人種は世界に居なかつた等といふやうになつたのである

が、思ふに彼等はイスラエル十二族と共に各地に離散したらしく思はれる。然るにオクスフォード大學の考古學の權威セイス博士の發表した處によれば、今此へテ人と似通つた人種を世界に見出す事が出来ると思はれば、それは日本人のみである。其骨格、其顔付は日本人に酷似し、眼尻が上つて居り、髪は我神武天皇時代の人を繪に見る如く、辮髪を束ねて居たとの事である。日本人の中に確かに此へテ人の血が入つて居るとは私一個の想像ではない。

日本語のヒト(人)といふ言は日本固有の言であるが、之は何處から來た言であらふ。例へばワタクシ(私)といふ言は、私は初め日本固有の言であると思つて居たが、實は支那語から來た言である事を知つて驚いた。即ち「我當身」(ワタンジン)といふ英語で云へば *I myself* の意の支那語の轉訛したものである。然し此ヒト(人)といふ言は日本固有の純粹の日本語で、支那から轉訛した言ではない。是はへテ人のへテから來た言ではあるまいかとの事である。尙或博士の説によれば日本人の姓のハタ(秦)、ヘタ

(戸田)、エタ、又はヒダ(飛驒、日田)などいふ言も言語學上からは同じ語源から起つたもので、へテより來たものではないかといふ。是に類似する言は多くある。(畑のハタは「ホアタ」即ち火田の支那語から轉訛したもので、之は別である)。是等の點よりしても日本とへテ人と關係あつた事を想像出来る。尙前述のスマル人は聖書のエラム即ち今のペルシャの都のササに居住して發展したとの事であるが、日本の古代史にササノオノミコト(素盞鳴尊)が兵を率ゐて東に上つたとあるが、或は是は其都の一人の王ではなかつたらうかとの想像も出来る。是等の事は未だ研究すべき問題で、私は之を斷言するのではなく、唯研究の資料に迄申上げるのみである。兎に角、かゝる一種の人種が日本に來たといふ事だけはいへる。

日本の先住民はアイヌ人である。今北海道の一部に僅かに見出す少數のアイヌは日本人と同化せずに残つた者であるが、昔は九州の果に至る迄日本中に居たものである。現在各所にアイヌの地名が多く残つて居る。例へば富士、江戸(エト)縁の轉訛、

能登、津輕、青森等皆本來はアイヌ語である。即ちアイヌ人が日本各所に住んで居たものである。一體日本人は雜種で、少くとも五つ位の人種が入り込んで居る。即ち先住民たるアイヌ、外來人種としてはイスラエル人、其に伴ふて來たヘテ人、朝鮮及び支那より渡來した者、及び南洋から入つた者等である。日本人は同じ黄色人種でも朝鮮人や支那人とは其體質に於ても其氣質に於ても、餘程異なつて居る點がある。例へば日本人中に非常に毛深い人があるが、是は朝鮮や支那にはあまり見られぬ處で、中にはアイヌも三舍を避ける程の毛深い人も居る。殊に九州の南の鹿兒島や琉球に多いが、私は之を南アイヌと呼んで居る。又日本人中に縮れ毛の者が居る。(近頃は態々鑊をかけて髪を縮らす現代の婦人が居るが、それでなく、生來の縮毛の人)。學者等は是は南洋ネグリート(黑人)の血を受けたからだといふが、黒人の縮毛は或人が髪でない毛だといつたやうに、羊の毛の如く又繪に見る釋迦の頭の如くに縮れて居るが、日本人の間に見る縮れ毛は波形に縮れて居るので、これはイスラエル人の血を受けて居る

事を示すものである。猶太人は髪かみの毛けの縮れ具合で解ると迄いはれて居る。

かく日本人が雜種であるといふ事に就ては、後に詳しくいふ積りであるが、これには特別に神の聖旨があつた事である。日本にかく様々の人種が入込んで來た一の理由は、前述の東方憧憬から東へくと進んで來て、是以上は行かれぬから此島國に止つたものであらう。然し中には更に進んで北方カムチャツカよりベーリング海峡を横ざり、アメリカに迄いつた今のアメリカン・インディアンのやうな者もあつた。

尙此處に附加へていつて置きたいのは、ヒツジ(羊)といふ言に就てである。是は我國固有の日本語であるが、此言の起原を知るならば日本人の起原に就て知る所があると思ふ。ヤギ(山羊)は支那語のヤングより轉化せしもの(ングといふ支那特有の發音が日本になき爲めギとなつたのである)。之と同様にカギ(鍵)はカングの支那語より、ネギ(葱)はニングより來た言であるが(今も東北ではネンギと呼ぶ)、羊は日本固有の日本語である。然るに日本に於ては今こそ羊を飼ふが、昔は羊が居なかつた。畫家に

羊を畫いてくれと頼んだら山羊を畫いたといふ話もある。羊が居なかつたのに羊といふ言が昔からあつたのは、如何なる理由であらう。或は我民の祖先が亞細亞の何處かに於て羊を飼つた時代がなかつたらうかと思はれぬ事もない。サル(猿)といふ事は純粹のアイヌ語であるが、今アイヌの居る北海道には猿は一匹も居ない。是はアイヌ人が昔内地に居た事があるといふ一の證據である。かくの如く、我民族の祖先が遠き昔、亞細亞の何處かの平原か高原かで羊を牧つて居たのではあるまいかといふ想像も出来る譯である。是等の事に就ては今後の研究に待たねばならぬ。

尙一ついつて置きたい事は、前述のヘテ人は自分等の偶像を祭つて居る場所を「コマノ」或は「コマナ」といふ。彼等は其處で、彼等の神を禮拜して居た。扱て日本に熊野神社なるものがあるが、其由来が如何しても解らぬ。又何を祭つたものであるかも解らない。而も是は我國の神社中最古に屬するものの如く、日本人の渡來と共に入來つたものらしく思はれる。紀州新宮の熊野神社と出雲にある熊野神社とが最も舊い。

クマノ(熊野)もコマノも餘り變らぬ。(越後人は心持を「くゝろもち」と發音し、沖繩縣でも「く」の音と「こ」の音が混同する)。されば是は日本に渡來した或人種が持込んだ偶像ではなからうか。神武天皇東征の時、海を越えて來たものは日向から紀州に來り、其處より伊勢大和の方に行つたが、一方大陸から來た者は朝鮮を経て出雲に渡つた者で、此二つが大和に於て落合つた處、同民族だといふ事が解つて、此處で結合したといふのであるが、これ即ち日本民族とヘテ人と關係があり、又紀州と出雲に最も舊い熊野神社がある所以ではなからうか。

第四章 過去に於ける猶太人と

日本人との關係

猶太人渡來の歴史的根據——融通の民の渡來——「秦」姓の由來——太秦(ウヅマサ)姓と大酒神社——風俗習慣の上よりの日本人と猶太人の相似——節句、七日、宮詣り、神社の構造、神前手洗、衣物、草鞋、頭に物を載せる習慣、帶——日本初代の人種たる流球人と猶太人——流球の墓と看過牛の祭、子供の鞠歌——大嘗祭の儀式、○○の○○に就て——佛國一考古學者の説——イスラエルの二派の東方移住——日本民族は三種族の混成——大使命を賦けられし特殊の民

次に私は日本人の中に猶太人の血が混つて居るといふ事を歴史の上から證明したい。猶太人が我國に渡來した事に就ては歴史的に根據がある。今より千六百四十九年前、應神天皇の第十四年、皇紀九百四十三年に弓月王が百二十七縣の百姓を伴ふて日

本に渡來して歸化したと歴史にある。是は又融通王とも書くが、どちらも當字であつて、「ユーツー」と讀む音がよい。人數は三千五六百人であつたらうといはれて居る。此ユーツーとは猶太人ではあるまいか。今でもロシア人は猶太人の事をユードと呼んで居る。此人々が非常な勢を以て來た。今頃でいへば三十萬人も入込んで來た程の騒ぎであつたらうと思はれる。此人々は支那朝鮮を経て日本に來たのであるが、養蠶や絹を織る事を教へ、文明を齎らした爲め上下擧つて彼等を大に歡迎した。其以前とても日本に機械がなかつた譯ではない。麻の白衣を織る事は知つて居たが、柔かい絹を織る事を教へた爲に非常に喜ばれたのは無理もない。

其後仁徳天皇の時にも亦百二十七縣のユーツー民來朝し、又雄略天皇の時にも來朝したと記録にある。是は歴史に書記されてある事實であるが、是は二千五百年前、猶太王國滅亡と共に猶太人が東方憧憬によりて遣つて來たものと思はれる。支那の河南省には現に何族か解らぬが、確にイスラエル人民の一部と見らるゝ者が残つて居ると

の事である。日本に來たのも猶太人であつたに相違ない。

當時天皇は非常に喜ばれ、之にハタ(秦)の姓を賜はつたといふ事も明白に記録してある。ハタとは彼等が機織を専門にしたからだといふ人もあるが、機を織る事は彼等に教へられる迄もなく、我國には其前からあつた。或は秦の始皇帝の人民であるからといふ説もあるが、それよりも寧ろかのイスラエル人に從屬して居たヘテ人の「ヘテ」の轉化であるとするべきではなからうか。綴りからいへば、埃及ではヘテ人を「Heth」と呼んだが、その「g」が「h」に代つて「Heth」になつたに過ぎぬ。

尙雄略天皇の時には此人々に「ウヅマサ」の姓を賜はつたとある。漢字で太秦と書く。京都の附近に太秦村と書いてウヅマサ村と呼んで居る處がある。ウヅはウヅの訛で、矢張猶太の事であらう。最初は「禹都滿佐」と書いたものであるが、後に太秦と變つた。何故かく變つたかに就ては、其後支那が羅馬の國と交渉するやうになつてから、羅馬は非常に進歩してゐた爲に、之を太秦と呼んで居たので、此字を當筈め

たものらしい。太秦村に廣隆寺といふのがあり、ウヅマサ寺ともいふ。其側に大酒神社といふのがあるが、佐伯好郎氏の言によれば、之は元は「大辟」と書いたものであるのを、後に辟に「走」をつけて「大避」神社と呼び、それが更に一轉して大酒神社となつたのであるといふ。其處は又ダービー神社ともいはれて居るが、是即ちダビデの名で、漢字で大辟と書くのである。其處にある井戸の名を「イスラ井」といふのである。更に面白いのは、其處に舊の九月に牛祭といふ祭があり、一人の人が鬼の面を冠つたり等して假装して牛に乗つて出ると、箒や棒をもつて居る皆の者が之を逐ひ拂ふ儀式がある。是は其人に病氣だの汚だの一切の惡を負はせて、之を地獄に放逐する意味だとの事であるが、之はいかにもイスラエルの贖の日の儀式によく似て居るではないか。是等の事を以て見れば、日本に猶太人の入り來つた事は歴史上證明せられる事で、我民族の中にはイスラエル人の血が入つて居るのである。我等と猶太人とは何の關係もない處ではない、血に於て切つても切れぬ關係のある事は注意すべき事である。

ある。無論他の人種の血も混つては居るが。

尙日本人の風俗と猶太人の風俗とは極めて似て居る。例へば節句の祭の時、蓬や菖蒲を屋根から門口に垂らすのは結茅の節に似て居り、蓬餅は苦菜を入れたパンを表はすものであるやうに思はれる。又月の七日には旅立ちするなといふ諺は、猶太の安息日を守る習慣から來たものらしく、又三、七、十二等の數を重んずるのも、猶太の風習に似て居る。子供が生れると宮詣りといふ事をするのは、猶太で子供を神殿に連れて行つて献げる事と似て居る。日本の神社の構造は猶太の神殿の構造に似て居り、殊に聖所と至聖所とに分れて居る所の如きよく似て居る。神前に出る時には手を洗ふ習慣の如きも似て居る。昔の着物はいふ迄もなく、草鞋をはく處など猶太人其儘で、又京都の大原女や大島や琉球の女が頭上に物を載せて歩く處も猶太人其儘の風俗であり、腰に帶するといふ言が聖書にあるが、是なども日本人には解るが、西洋人には解らぬ。又かのバルテマイが目を醫されんが爲に上衣を脱いでイエスの許に飛出して來たとい

ふ如きも、此上衣とは日本のドテラ又はチャン／＼コのやうなもので、高貴の人の前に出る時着て居ては失禮だから之を脱いだので、洋服の上衣なら脱げば却て失禮になる。かく數へ來れば色々の点に於て相似て居る事が次から次へと出て來る。容貌の点に於ては、日本人は猶太人に極めて似て居る。是は猶太人の血が流れて居るからであらう。私の友人が英國で猶太人の集會に行つた時、何處から來たかと問はれたから、日本から來たといふと、それではジャバニス・ジユウが來たといはれたといふ。

尙此處で是非いはねばならぬ事は琉球の事である。琉球人は南洋から渡來して來た人種であらうといふ者もあるが、彼等は日本初代の人種であるに違ない。といふのは彼處では今だに平家時代の雅びた言語を使つて居る。例へば、しらべらん（知り侍らず、即ち知りません）、みそうらへ（見候へ、即ち御覽なさい）、いよかんそらへ（魚買ひ候へ、即ち魚をお買ひなさい）の類である。其琉球の墓が猶太國の墓其儘である事は注意すべき事である。横に穴を掘り、其處に先祖等の骨を納め、漆喰で塗つて立

派にしてある。琉球人は墓に多くの金をかける。墓は身代の中の重なるものである。實に立派なもので、白く塗りたる墓を見たくば琉球に行つて見ればよい。又此琉球には看過牛とて、牛を殺して其血を自分の家の門口に塗り、一切の厄病を拂ふ儀式があるが、是は猶太の逾越節其儘である。是は嘗に琉球のみならず、大島にも徳の島にもあり、魔除けといつて、牛を殺して其血を柱に塗るといふ。尙琉球の子供の鞠歌に、「お父さん餅頂戴」といふのががある。是は昔目に見えぬ天のお父さんがパンを降らせて其日／＼民を養ひ給ふた。然るに民の中に一人の怠惰者があつて、毎日取りに行く事を面倒に思ひ、二日分一緒に取つて寝て居たが、天のお父さんは之を見てパンを降らせる事を止めになつたから、お父さんモー一度パンを降らせて頂戴といふ意味である。是は出埃及記中の記事を聴くが如くである。日本人と猶太人とは斯様に風俗習慣に於て相似て居る点が多い。之は偶然だとして片附けて終ら譯には行かぬのである。小谷部氏の「日本及び日本人の起原」の中にも、日本の皇帝即位の大嘗會等の儀

式は舊約聖書の利未記や申命記を見なければ解るまいと記してある。尙〇〇の〇〇に就て考へて見るに、〇〇〇の〇〇は一体何であるかといふ事は古來色々の説があるが、小谷部氏はマナを入れた金の壺であると説かれた。又近松門左衛門の淨瑠璃の中にはそれは石の鼎であると記してある。私は五十年前に其は石であるといふ事を聞いた。明治維新の際全國の神社の御神体調べをした時に見たものかも知れぬ。そして其は純金の箱に入れてあり、〇〇の代る毎に其上に白絹を覆ふて今日に至つたもので、其が金の舟に納めてあるとの事である。私は唯聽いた事をいふより外出來ぬから、其は嘘だから取消せといはれれば取消す。そして其石の上にカルデヤの文字が書いてあるとの事であるが、思ふに今より二千五百年前、ユダヤ王國瓦解に際し、契約の櫃の中の石の板が何處に行つたか其所在が解らなくなつたが、此十誠を記した石碑こそ〇〇〇の〇〇ではなからうかとさへ思はれるのである。もし然らば日本國民が神よりの使命を受けて起つ上に非常に意味深い事である。然し其は石でない、間違つて居る

といはれ、ば其迄であるが、私は聞いた事から想像したに過ぎぬ。

次に〇〇の〇に就ては、日本には其頃立派な劍は出来なかつたのであるから、當時ダマスカス・ブレイドといつてダマスコから産する世界に優秀なるものを、我民族が渡來した時もつて來たものではあるまいかといはれて居る。次に〇〇の〇〇に就ては或人はあの玉は地中海と紅海の通ずる途中に産する特殊の寶石の一ではないかといつて居る。されば是等の事より推して見て、日本の〇〇の〇〇といふ物は日本在來の物ではなく、我祖先が渡來と共に持つて來た物ではあるまいかと想像せられる。

私は是等の事を以て直様日本民族がイスラエル人と斷言する者ではないが、唯我大和民族は猶太民族と關係があるらしいといふ事を御參考に申上げるのである。或佛蘭西の考古學者のいつた言に、イスラエル十二族の支派の中の二の支派が我等は日出る國に行かん、其處に行くには二年半を要するといつて出立したといふ傳説がある、といふ事をいつて居る。是に就て小谷部氏はガドとマナセの族であらうと附加へて居

る。日本に於て「ミカド」といふ言は如何なる處から出たか判然しないが、或は是はガドといふ言から出たのではあるまいか。又マナセ、ミナセ、ツチミカド等の姓がある。イスラエル十二族の中ユダとベニヤミンだけが捕囚より解放せられてエルサレムに歸り、キリストはユダの裔より出で、パウロはベニヤミンの子孫より生れた。現在世界に千五六百萬人の猶太人が居るが、彼等は皆此二の支派から出て來た者である。他の十族も此中に入つて居るだらうと主張する者もある。或は幾分は入つて居るかも知れぬが、失はれし十族の中英國に入つて居る者もある事は事實で、又日本に入り込んだ者のある事も想像出来る。日本には一は印度洋を渡つて來り、一は大陸を横斷して支那を経て來たものであらう。

終に以上の事實に従ひ、私の淺薄なる智識に基きて結論すれば、日本人はセム、ハム、ヤペテの三種族より成立つて居る。即ちセム種に屬する猶太人とハム種に屬するヘテ人、それにヤペテ種の白哲人種に屬するアイヌ人とである。アイヌ人はアリアン、

コーカシアン等歐洲人と同じく白哲人種に屬する事はバチエラ博士を待たずとも知られる。されば日本人は單一なる人種ではない。世界中に是等の三種族の雜居して居る處はあるが、米國の如きはそれであるが、日本のやうに是等の三種族が雜婚して一の新しき民族を生み出した處は外にない。是等の人種が東方憧憬によりて打つて一丸となつたもので、血によりていへばセム、ハム、ヤベテの血が流れて居る。實に日本民族は特殊の民である。此民族こそ世界に向つて大使命を果すべき民であると思ふ。我等は大に自重したい。かゝる血が我等の中に流れて居るが、況んや聖靈は我等の中に在し、主イエス再臨の光を與へられ、全世界に向つて使命を果すべき者とせられて居るに於てをや。

第五章 天祐を蒙りし日本

景教の傳來——弘法大師と景教——景教前の基督教と散在せる猶太人——トマスの東洋傳道と地極探險——我國の受けし四回の惠——景教の廣まらざりしは攝理——元寇襲來と支那謳歌の夢の覺醒——成吉思汗の遠征と忽必烈の宗教利用策——北條時宗の英斷——危急存亡の秋に於ける天祐の勝利——宗教上危機なりし所以——景教消滅の理由——天主教の渡來と傳播——徳川幕府の禁令と神の攝理——家康が鎖國主義を取りし機縁——英西戰爭と三浦按針——日露戰爭と天祐——今や重大の秋大に祈るべし

『然どわが僕イスラエルよ、わが選めるヤコブわが友アブラハムの裔よ、われ地のはてより汝をたづさへきたり、地のはしよりなんぢを召かくて汝にいへり、汝はわが僕われ汝をえらみて棄ざりきと、おそるゝなかれ我なんぢとともにあり、驚くなかれ我なんぢの神なり、われなんぢを強くせん、誠になんぢを助けん、誠にわがたゞしき右手なんぢを支へん』(以賽亞

書第四十一章八節より十節

此聖書の言は直接にはアブラハムの子孫に對する約束であるが、我等信仰によりて彼の子とせられたる者も亦信仰によりて此約束を受くる事が出来るのは、幸なる事である。然し更に冀ふところは、我同胞も亦斯の如き神の眷顧に價する國民とならん事を祈つて止まざる者である。

本章に於ては天祐を蒙りし日本と題して、歴史の上より我國が神の攝理の中にある事實を見たい。抑も基督教は昨今日本に入つて來たものではなく、余程以前より傳來したものである。七八十年前新教が傳來した事は人皆知る處であるが、これより先三百年前、既に舊教即ち天主教が傳へられて居たのである。更に其よりも遠き昔に遡れば、今より千二三百年前、唐の時代に景教なるものが日本に入つて來たが、是は唐の時代に盛に行はれたネストリアンの基督教である。一体基督教なる名は歐羅巴に於て用ひられた名であつて、ネストリアスによりて傳へられ、東へくと傳はつた所謂

ネストリアン・クリスチャニチーなるものは支那に入つて景教と呼ばれた。當時支那は最も盛なりし唐の時代であつたが、此教が盛に傳はり、上流社會に入り込んだ。支那に現に景教之碑なるものがあり、之に其由來が記してある。是が日本にも傳はつた事は歴史の證明する處で、波斯寺といふものが彼方此方に建立せられ、天子も洗禮を受けられたと記録してある。其頃我國より多くの留學生が支那に行つたが、其中に僧の空海、後に弘法大師と諡せられた人の如きは此景教を學んだであらうとは、種々の事によりて證據立てられて居る。彼の如き秀才が此景教に無關心であつたとは考へられぬ。彼が作つたいろは四十七文字も實はキリストを詠んだものであるとさへいはれて居る。成程七文字くに分けて最後の字を結びつけて見ると、「答なくて死す」となつて居り、キリストの贖の死を暗に織り込んで歌つて居るといへる。又眞言宗で行はれる灌頂式といふのは基督教の洗禮式より轉化したものであるらしい。基督教と眞言宗との關係に就ては尙興味深い數々の問題があるが、是に就ては他日に譲る。兎に

角景教の名の下に傳へられし基督教が、我國にも千二三百年前に入り込んだ事は事實である。其景教が日本に擴らざるに、跡方もなくなつた理由に就ては後に申上げる事にする。

然らば其景教の傳來以前に於ては、我國は基督教と無關係であつたかといふに、私の調べた處によれば、其以前にも初代基督教が日本に傳はつて居たのではないかと思はれる節が多くある。私は是をブレ・ネストリアン・クリスチアニチー(景教前基督教)といふ。千六百年前、應神天皇の頃より猶太人が日本に渡來した事に就ては、既に前章に於て述べた。其等の猶太人が基督教を受入れた猶太人であつたか否かは判然しないが、使徒行傳二章を見れば、ペンテコステの日に於て敬虔ある猶太人及び其教に入りし人々天下の諸國より來りてエルサレムに留つて居たが、悔改めて靈の火を受け、各々其故國に歸つたといふ事が記してある。故にパウロは「其聲は偏く世界に出で、その言は地の極にまで及べり」(羅馬書十〇十八)といつて居る。或人はこれはパウロ

に地理的觀念がなかつたからだといふが、然うではない。其時惠を受けた人々によりて事實福音は諸方に傳はつたからかくいつたのである。是等の猶太人によりて其行く處何處にも初代基督教が傳はつたと想像するは當然である。是は今より千九百年も前の事である。パウロが歐羅巴に傳道するに當つて、此等の猶太人を足場にして福音を傳へたといふ事は、我等が使徒行傳に於て常に學ぶ所である。東洋諸國に於ても其如く、當時諸方に散在して居た猶太人を足場として傳道せられたのであらうと想像し得られる。所謂ネストリアン前の基督教は初代基督教であるが、是を東洋に宣べ傳へた者の中最も大なる働をなした者はトマスである。彼はスリヤのエデッサよりメソポタミヤ、ペルシヤ、印度に迄來り、印度の北西の處でバラモン教徒の爲に殺されたといはれて居る。今一説には更に進んで印度を中斷して東方に進み、それは支那迄來るか日本迄來るか解らぬが、其歸途殺害せられ、弟子達は之をスリヤのエデッサに葬つたといふ。又バルトロマイも印度の方へ來たらうといふ説がある。兎に角當時の弟

子達は「遍く世界を廻りて凡の人に福音を宣傳へよ」とか、「地の極に迄我證人となるべし」との命令に従ひ、文字通りの地の極に迄證せんと非常の勢で傳道し、是以上は行けぬといふ處を見出して、其處に福音を傳へんものをと、熱心に傳道して廻つた。されば或は此東洋の極に迄やつて來たのではないかとも想像される。何かさうした形跡がないかと今も尙研究中である。兎に角基督教は昨今日本に傳はつたのではなく、余程昔から傳はつて居たものである。幾度か傳つて來たのであるが、唯永續きがせなかつた迄で、私は日本は四回目の恩恵に浴して居るのであらうと考へて居る。景教傳來の時と天主教傳來の時、それに新教渡來の時は明白であるが、其前にも傳はつたとすれば、四回になる。いづれにして昨今傳はつた新しき教と思ふのは淺見である。

かく日本に幾度も基督教が傳はつたが、どれだけの範圍迄廣まつたか、又どれだけの人が信者になつたかは解らぬ。早くから傳はつたに拘らず、立消えのやうな有様になつたのは残念のやうであるが、是は神が攝理の中に廣まる事を許し給はなかつたの

で、深い意味があると思はれる。ネストリアンの基督教は支那に於て多少異教的臭味を帯びて來た。即ち死者を祭り、死者の冥福を祈るといふやうになつて來た。されば神は斯る支那に於て亞細亞の異教的臭味を帯びて來た基督教が日本に廣まる事を許し給はなかつたのである。もし斯る基督教が日本に廣まつて根を下ろしたならば、今頃日本が如何なつて居た事を思ふ時、我等純福音を信ずる者は残念に思はぬどころか却て神の攝理を知つて感謝する者である。

次に天祐を蒙りし日本といへば誰人も思ひ出すのは、かの弘安の役の事である。今より六百五十一年、邦紀千九百四十一年の五月、元の忽必烈が兵十萬を差向けて我國を侵さんとした。此元寇こそは我國にとつての一大警鐘で、此時我國は累卵の危きにあつたが奇跡的に救はれた事は、我々日本人に取つては忘るゝ能はざる所である。是より先我國は約千年に亘る長い間、凡てに於て支那の教育を受けて來た。當時支那は漢、唐、宋にかけての、支那に於ける最も文化の發達せる時代であり、文物燦然たるも

のがあつた故、其支那文明が漸じい勢で日本に入り込んで来た時、日本は一も支那、二も支那と、支那を謳歌し、盛に支那に模倣したものである。漢語は其頃我國に傳つて来たものであり、又唐の時代には我國より多の留學生が彼地へ渡つた。かゝる時は兎角民族の自覺(Racial Consciousness)が失せ易く、無暗に外國を模倣したがるものである。明治初年に於ては歐化主義が我國民を風靡した如く、當時は大に支那かぶれに陥つた。吳服太物とは吳の服といふ意味であるのも其一例である。斯る時此元寇といふ一大事變の突發によつて我國民は眼醒めさせられたのである。

却説支那に於ては宋が滅び、元の時代となつた。かの成吉思汗が蒙古より起つて破竹の勢を以て歐洲に迄攻め入り、今のダニユーブ河の邊り迄征服して、歐洲の東部は皆彼の版圖に歸した。されば歐羅巴の帝王等は蒙古に使節を遣はして御機嫌をとるといふ有様であり、基督信者等も縮み上つて居たものである。其成吉思汗に嗣いで起り、支那を統一したのが彼の忽必烈である。彼は向ふ處敵なき有様で四隣を平定し、

遂に國號を元と改むるに至つた。(此忽必烈の下に伊太利ヴェニス商人のマルコポロも居たのである)。此忽必烈は中々狡猾な男で、今も宗教を利用せんとする者がある如く、彼は當時亞細亞や蒙古に偉い勢で傳はつて居た景教や回教を利用して己が國士の擴張を企てたのである。彼は回々教徒が宗教の力を以て國士の擴張を圖るのを見て之に倣ひ、先づ景教の牧師を抱き込んで歐羅巴諸國へ探偵に出した。其中の一りにマコと呼ぶ蒙古人があり、後にバグダッドで景教の大監督と迄なつたといふ事である。當時の歐羅巴はかの有名なる十字軍が聖地恢復の爲に奮起した頃で、其第七次出兵が失敗に歸して、回々教徒の爲に散々な目に遇はされ、エルサレムを取返し損つたのを見た忽必烈はマホメット教徒をも抱き込み始めた。

此忽必烈が非常な勢を以て日本に對し、先づ五人の使者を遣はした。其中にはマホメット教徒も居り、其名はサラデンと呼ばれた事が歴史に出て居る。是は忽必烈が歐洲諸國には景教の者を探偵に遣はした如く、マホメット教徒を利用して國を廣めんと

する魂膽であつたのである。時の執權北條時宗は齡僅か十八歳の若年であつたが、こんな書を我國に寄越すとは何事だと許り、此五人の使者を七里ヶ濱に於て斬殺して終つた。其處で忽必烈は烈火の如く憤怒し、一小島國の癖に何たる不禮ぞ、一潰しにしてくれんとて兵十萬を差向け、一舉朝鮮を乗つ取り、日本に攻めて來たのである。此時は實際我國に取つて危急存亡の秋で、此時始めて長い間の支那崇拜より脱して、我々は日本人だといふ意識を確實にしたのである。而して貴賤貧富老若男女を問はず、國を擧げて此國難に處し、眞に舉國一致の行動を以て之に當つたのである。畏れ多くも龜山天皇は御自づから伊勢大廟に詣でられ、身を以て之に殉せんと祈願遊ばされ、國中何處の社寺に於ても祈願が捧げられた。此時かの日蓮が起つたが、雷に日蓮のみならず、神官も佛僧も百姓も町人も皆、我等は日本人である夷等に敗けてたまるものと奮起した。其結果は物の見事に日本が勝ち、元の軍勢は全滅して終つた。伊勢の神風があつたからだといはれて居るが、兎に角我國に天祐の加はつた事は争はれぬ事

である。

私は此處で戦争の話をするのが目的ではない。もしあの時日本が負けて居たら如何なつて居たであらうかと考へる時、慄然たらざるを得ない。宗教的にも全く危険の時であつた事を思はねばならぬ。かの時回々教徒が使者の中に居たといふ事を既にいつたが、當時回々教徒は片手にコーラン（經典）を携へ、片手に劍を提げて、劍の影に天國あり、信ぜぬ者は片端から打殺すぞと、偉い勢で進んで居たが、其後には歐羅巴諸國を無人の境を進むが如き勢を以て征服した元が扣えて居た。もしあの時に日本が負けない迄も妥協でもしたのなら、回々教が偉い勢で日本に傳はつたであらうと思ふと、神が此時日本の爲に大敵を喰ひ止め給ふた事を、宗教上の立場から大に感謝せねばならぬのである。現に回々教の盛なる國に神の祝福が無くなつて居る事を見るにつけ、北條時宗の英斷に對しても感謝せずに居られぬ。然し其裏に神の攝理の御手が加はつて居た事はいふ迄もない。

此處で附加へていつて置きたいのは、其時支那に傳はつたマホメット教は今尙残つて居り、西方滿洲にかけて約三千萬人の全教徒が散在して居る。當時景教も傳はつたがマホメット教の暴力主義に對抗出來ず、マホメット教に改宗を強ひられて之に應ぜぬ者はドシ／＼殺された。即ち小亞細亞、波斯、北支那、蒙古、滿洲等にあつた景教徒は全部改宗させられるか、或は殺害せられるかして、跡形もなくなつて終つた。當時景教の根據地は支那の西南のベルシヤで、支那を通じて日本にも來たのであるが、支那の景教徒がマホメット教徒に依て滅ぼされた爲め、日本の景教徒はベルシヤの本部との交通が中斷せられ、遂に我國の景教徒は佛教と妥協して其本來の教を失つて終つた。然し是は却て喜ぶべき事であつたのである。又マホメット教も日本に來なかつた事は實に幸福なる事であつた。(因に當時歐羅巴に傳はつた基督教は希臘語を用ひ、東洋に傳つた景教はスリヤ語で傳へられ、其文字が蒙古の方に移つてウキーグル語に用ひられるやうになつて、是が滿洲語になつた。奉天にある清朝の墓に記してある碑文は明

かにスリヤ語の脱化したものである事を見る。これより朝鮮の諺文が生れたのである。かく當時の景教の結果は單に蒙古滿洲朝鮮の文字となつて残つただけで、景教そのものは跡を絶つに至つたのである。)

かくの如く基督教は日本に傳はり始めたが中斷せらるゝに至り、其後三百年余を経たのであるが、當時スペイン人は頻りに東洋發展を企て、呂宋(今のフィリッピン)を占領し、非常な勢力を以て元龜天正の頃に長崎に入港した。我國に於て其齋らした文明に驚き、朝野の士は大に之を歓迎した爲め、基督教は非常なる勢を以て朝野に傳播するに至つた。次に秀吉の時代に至るや更に廣く、大なる勢を以て傳はつた。東北の極津輕藩にも此教は傳はり、津輕の最初の藩主津輕爲朝は自ら洗禮を受けたと申出でた處、其當時しつかりした宣教師が居たと見え、妾を蓄へて居る爲め斷られたので、止むなく其二人の子供に洗禮を受けさせたといふ。諸國の大名中信者になつた

者も大分あつたが、就中高山右近の如きは基督教徒大名として名高く、戦争の時は十字架の旗を押立てて進んで行つたものであるといふ。

然るに幾干もなく切支丹法度の禁令が出で、傳道者等を皆外國に放逐して終らやうになつた。此禁令は既に秀吉の時にも發せられたが、其後家康を始め歴代の徳川幕府は一意此方針に則つて鎖國主義を取つた。私は曾ては此事を残念に思つた事もある。もしかの時かゝる下手な事をせずに、メキシコ、カリフォルニア、オーストラリア、南洋邊に迄手を伸して居たのであれば、今頃殖民地がなくて困る心配など少しもなかつたらうに、此時以來三百年間日本は鎖國して終つたとは、徳川幕府は考のない事をしたものだ、と大に残念があつた事があつたが、然し私は先年南阿より南米、歐洲にかけての舊教國を視察した時、始めて神の聖旨は那邊にあつたかを伺ひ知る事を得て、眞に感謝した。マホメット教國が衰微して居る如く、天主教國には神の祝福が止んで居る事を目撃したからである。もし三百年前にあの當時の天主教が日本に愈々深く入

り込んで廣く傳はつたならば、日本は今頃どうなつて居るであらう。然し感謝すべき事には、徳川が之を逐拂つてくれたのである。是神の攝理の中にあつた事で、眞に感謝に堪えない。最近スペインの例を見ても解る。天主教の僧侶等が法王を後楯にして好き勝手な事をした爲に、遂に國家を危くして終つたではないか。又カトリック教の盛んな處では何處でも猶太人が虐められて居る。されば猶太人を虐待する天主教國が神の祝福を受けぬのは當然である。神はアブラハムに仰せ給ふた如く、此選民を祝する者を祝し、之を呪ふ者を呪ひ給ふのである。されば三百年前我國に渡來して一時は非常なる勢を以て上下階級を蠶食せんとした天主教が、徳川の彈壓によつて火の消えたやうになつて終つたのは、神が攝理の中に徳川を用ひて其廣まる事を許し給はなかつたのである。爾來三百年我國は鎖國主義の中に閉籠り、今漸く世界の表に立つて活躍して居るのも亦深き神の攝理である。三百年間鎖國主義で押し通した事は、物質的にはいかにも損失であつたやうに思はれるが、然し時と期とを定め給ふた神が今日

世界の表に活躍せしめんとて我國を護り、天主教の跋扈するのを防ぎ、育て、居給ふたのである。

扱て此處に家康をして鎖國主義を取つて動かぬやう、彼の腰を強くせしめた一の逸話がある。西暦千五百八十八年、我國の天正年間に於て西班牙と英國との間に大戦争が起つた。其原因はスペインはコロンブスの亞米利加發見後非常なる勢を以て進出し、各國に通商貿易を開いて遂に海上の覇權を握るに至り、之を見た英國は何とか自分の方も貿易を盛んにして之に對抗せんとしたが、到底西班牙に拮抗する譯に行かぬ。其頃の英國の海運業者は半ば海賊のやうなものであつたが、其英國の海賊船が西班牙の商船を襲つた。之を知つた西班牙は英國を膺懲すべしと、無敵艦隊百三十艘に大砲三百十六門を積んで攻めて行つたのである。英國軍艦は島陰に隠れて居り、西班牙艦隊が威風堂々ドーバー海峡に乘込んで來たのを待つて其後に廻り、時恰かも烈風暴れ狂ふ時、風上より後ろから不意撃に砲彈を浴せかけた。何せ今とは違つて帆前船の事

ではあり、烈風の中ではあり、風上からドン／＼撃たれるので、自由に神速の行動を取る譯には行かず、大狼狽に慌てて唯逃げ出したが、スコットランドの北迄來た時、暗礁に乗り上げて沈没して終ひ、無事に本國西班牙に歸つた者は極めて僅かで實に悲惨なる敗北をした。爾來英國は代つて海上の覇權を握るに至つたのである。其頃英國は新教勃興の時代で、戦争は舊教の西班牙と新教の英國との宗教戦争の觀があつた。當時西班牙は英國の舊教徒が裏切つて自分の方につくであらうと秘かに期待して居たが、是は西班牙の認識不足で、舊教徒も新教徒と結束して西班牙に向つたのである。序ながら申して置くが、もし日米戦争でも起つたならば日本の基督教徒は如何するだらうなどと、聞くだに野暮な事を心配して居る者もあるが、それは此西班牙と同じ認識不足から來る心配である。

西班牙が英國に大敗してより十三年後、慶長五年關ヶ原に於て家康が勝つた後、九州豊後に於て一人の西洋人が見付つた。是は當時見馴れて居た西班牙人とは風變りの

西洋人であつたので之を捕へたが、家康は使者を以て彼を招き、伏見に於て彼を引見した。此男はウイリアム・アダムスといふ當時三十一才の英國人、漂流して九州に上陸した者で、家康は彼に就て西班牙の國情を具さに訊ねた。當時西班牙の人等は英國に負けた事など嘸氣にも出さず、西班牙は偉い國、強い國で、もし日本が反抗でもせやうものなら其こそ大變だと、唯嚇して居たのであつたが、此アダムスは家康に答ふるに十三年前西班牙は英國の爲に散々な目に遇つて大敗した事を以てして意氣軒昂、西班牙恐るゝに足らずと物語り、又英國の宗教はプロテスタントで彼等の宗旨とは違ふと語つて聽かせた。是が抑も家康をして意を強うして西班牙を背景にもつ天主教を放逐するを決心せしめた原因である。アダムスは其後十七年間家康の顧問として事へ、三浦按針と號したといふ。アンジンは水先案内の意である。彼は中々の學者で家康に幾何や代數まで教へたといはれて居る。今京橋の按針町といふのは彼が住んで居た處で、按針塚といふのも残つて居るといふ。

北條時宗が元寇恐るゝに足らずとて之を防いで大勝を得たのも、徳川家康が西班牙恐るゝに足らずとて舊教の侵入を防いで之を退けたのも、是を偶然といふべきではない。皆神の攝理の中にあつた事である。日本が國家としても又精神的にもかく危い處を再三救はれたのは、全能の神が我等に使命を賦け給はんとて、かく導き給ふた事を思ふて感謝に溢れる。元寇の時など信仰深き人は伊勢の神風があつたからだといつて居るが、我等は全能の神が我國を今迄護り給ふた事を思ひ、我國の歴史を見て一種嚴かなる感を抱く者である。

日露戦争の事に至つては、我等の記憶未だ新しいものである。彼の時もし負けでもしたらば、今頃我國は如何なつて居るであらう。東郷大將は天祐によりて勝つたと、天祐といふ言を使はれたが、大將は如何いふ意味で天祐といふ言を使はれたか知らぬが、或は漠とした意味であつたかも知れぬが、實際あの時は天祐であつた。我等基督教徒は天祐の何たるかを明かに知つて居る。天祐とは單なる文字の言ひまはしではあ

るまい。唯帝國軍人が強かつたからだとか、日本の海軍が強かつたからだといふ事の中に歸すべきではあるまい。明治大帝の御言の中にも天祐といふ言がある。我國の歴史を見るに、天祐が我國の上にあつた事を明かに知るのであるが、我等は今後も更に天祐を我國の爲に祈らねばならぬ。唯漠として祈禱をなすのでなく、全地を治めし又此民族に特別の使命を托し給ふ神の御指導によりて今かくあるを思ひ、今の危急の秋にも將來の爲にも、此神の御指導尙一層加はらん事を大に祈らねばならぬ。今や我等は日本國民として實に重大なる場合に遭遇して居る。今我國は武器の戦争ではないが世界を相手に戦つて居るのである。我國に世界を相手に戦つて行く事の出来る軍人や外交官のある事は實に感謝に堪えない。今ジュネーヴに於て我國の代表諸君は智謀を廻らして奮闘論戦して居らるゝが、我等はかの人々の知らざる祈禱の武器をもつて居る。此民族に使命を與へて今日迄護り導き給ひし神よ、更に此後も導き助けて我民族の使命を全うせしめ給へと祈らねばならぬ。此實に嚴かなる秋に於て、我等は日本

國民なりといふ大意識と共に我等は特に神に選ばれし者なりとの確信を新にし、我國民が神に護られて其大使命を遂行するに至るべき事を力を盡して祈るべきである。

第六章 日本に於ける基督教

運動に関する聖句

約束の成就する迄廢せざる民——日出る處(ミヅラホ)に聖榮表はるゝとの約束——日本に於ける主の御業——殊にリバイバルを受けし小き群——光は東より——初代信者埋葬の風習と復活の望——ミヅラホとミヅホの國——此二の語の意義——瑞穂の國に於ける神の祝福——日本と附近の島嶼に関する預言——歐洲聖書註釋家の偏見と東の極に関する預言——五大強國と日の邑の預言——日本將來に関する約束と祈禱の必要

愈私のいはんとする本論に移るが、此章に於ては日本に於ける基督教運動に関する聖書の言を見たい。

『われ誠に爾曹に告ん、此等の事悉く成るまでは此民は廢せざるべし』(馬太傳二十四章三

十四節)

此聖書の言は明かにイスラエル選民に関する聖言で、一切の預言が成就する曉まで選民は決して失せない事を保證するものである。私は此言を我日本人に當拵めて見たい。私は我日本人も神が日出る國に與へ給ふた約束を悉く成就し給ふ迄は決して廢せざるべしとの大確信を抱くものである。私は聖書の上より此日本に神の榮光が驚くべく表はれるといふ事を信する者である。私が日本人だから其を願ふといふのでなく、聖書の上より信するのである。此國に神の榮光が表はれるといふ多の約束が聖書の中に與へられて居る事は感謝の至りである。

『ぜんの中の神エホバ詔命して日のいづるところより日のいるところまであまねく地をよびたまへり』(詩篇五十篇一節)

『日のいづる處より日のいる處までエホバの名はほめらるべし』(詩篇百十三篇三節)

『西方にてエホバの名をおそれ日のいづる所にてその榮光をおそるべし』(以賽亞書五十九章十九節)

『日の出る處より没る處までの列國の中に我名は大たらん』(馬拉基書一章十一節) 是等は唯文學的の言ひ方ではない。日出る處とは日本を指して居ると私は信ずる。イザヤは今より二千七百年も前、未だ日本などは形をなして居なかつた時から、聖靈によりて此事を預言したのである。日出る處とは希伯來語で「ミヅラホ」で、東方日出る國に於て實際神は御榮を表はして居給ふのである。世界の宣教歴史始つて以來、日本の宣教運動ほど著しく進歩したものは無いといふ事である。舊に統計表の上からばかりでなく、事實神は我國に妙なる御業をなして居給ふのである。短い年月であつたが、上下あらゆる階級に福音は宣傳へられて居る。人數は僅でも神の榮は確に表はれて居る。我等の群には一昨年来リヴィブルを起し給ふて、少數ではあるが日本にある聖潔を信ずる群を目醒し給ふた。此リヴィブルの結果唯信仰が復興したのみでなく、

神の深き聖旨を悟らしめられ、殊に主イエスキリストの再臨に就ての約束が新に開示せられ、又舊に再臨の光をもつといふのみならず、主イエスよ來り給へと聖徒が心を合せて祈り、再臨を早める爲に盡す者となし給ふた。今世界の何處に我々の群以上に恵まれて居る處があるかないかは知らぬが、再臨の切迫が今日程鮮やかに啓示せられた時代はなかつたらうと思はれる迄に、我等の群に此事を示し、祈の靈を注いで言ひ難き慨歎を以て切に主の再臨の爲に祈らしめて居給ふのである。我國の聖潔を信ずる者は少數ではあるが、主イエスの聖名が崇めらるゝやうに切に祈り、又主イエスが來り給ふ事を眞に心の底から待望んで居るのである。是は實に何といふ貴い御眷顧であらう。全世界は最暗黒の幕に包まれて、活る神の聖名が極度に汚されつゝある今日、此東邦の異邦國日本に於てかくも主の聖名が崇められ、少數ながら生命懸けて主の再臨を早からしむる爲に使命にいそしんで居る者のある事は、以上の聖言の成就の一の顯はれではあるまいか、基督教がアフリカや印度、或は支那に傳はつて居るといふ意

味で、此日本に於て聖榮が表はれて居るといふのではない。神は此日出る國に於て驚くべき榮光を表はさんとして居給ふのである。

『時にイスラエルの神の榮光東よりきたりしがその聲大水の音のごとくにして地その榮光に照さる』『エホバの榮光東向の門よりきたりて室に入る』(以西結書四十三章十三、四節)

所謂「光は東より」との言は此言から出たものである。これは文字通り福音の光が日出る國より輝き出づる事を云ふ。事實リバイバルの恵により各教會は面目を一新せられ、駭々乎として進みつゝある有様をみるならば、誰も之を疑ひ得まいと思ふ。

更に「光は東より」といふ事を地理的に考へる時は、いかにも興味深い。聖書に於て再臨の主を象る「曉の明星」も「義の太陽」も共に東より昇り來るものである。されば初代の景教信者やスリヤの信者等は、その死體を葬むるに東方に足を向け、西枕にして仰向けに横たへる風習であつたと傳へられて居る。これは明らかに主の再臨を待

望む態度を示すものであつて、復活に際して直ぐ起き上られるやうにといふ配慮から割出したものらしい。

『而して日のいづるところより西のかたまで人々我のほかには神なしと知べし、我はエホバなり他にひとりもなし』(以賽亞書四十五章六節)

此處にある日の出る所もヘブル語の「ミヅラホ」である。先の引照中以西結書四十三章二、三節にある「東」といふ字はヘブル語のカデムであるが、之を除いた他の聖句の全部はミヅラホである。我國が昔より豊葦原ノ瑞穂國とよばれて來た事は、人の皆よく知る所であるが、この「ミヅラホ」と「ミヅホ」とは何か關係があるまいか、と今尙研究中であるが、ともかく何となく語呂が似てゐる。然かも「ミヅラホ」とは日出る處と譯してあるが、英語の rising といふ言で、「起きる」「昇る」「芽を出す」といふやうな意味であり、日本語の「ミツ」とは「瑞々しい」「穂を出す」「起上る」「發展する」といふ意味を含んで居る。俗にみづくしいといふのは新鮮なる勢をもつて

物が出て来る時の形容である。されば新しい齒が生へる事を「瑞齒ぐい」といふのを見ても解る。故に此「ミヅラホ」と「ミヅホ」の關係に就ては發音上から、亦その意味の上からの相似によつて兩者語原を同じうするものであるまいかと思はれるのである。いづれにしても神は現在この瑞穂の國を祝福しつゝ居給ふのである。此國に神は驚くべき榮を表はして居給ふ。現に神は妙なる御業をなして居給ふ事は感謝にたえぬ。世界に於て基督教が行詰つて居る時、此日出る國に於て聖榮を表はして居給ふ事は實に感謝である。日本人といつても何も特別な人種ではないが、此國人を選んで世界に證しせしめんとして居給ふのである。

『この故になんぢら東にてエホバをあがめ海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名をあがむべし』(以賽亞書二十四章十五節)

此處にある「東」とはヘブル語のウル即ち「光の國」といふ意味である。こゝで東と海の島々とを一緒にして、此處に神の榮光があらはるゝとある。島の多くある處と

は地中海にもあるが、之は東の方とあるから太平洋である。即ち是は日本と其附近の島嶼でなくて何であらう。

『かれは衰へず喪膽せずして道を地にたててをはらん、もろくの島はその法言をまちのぞむべし……海にうかぶもの海のなかに充るものもろくの島およびその民よエホバにむかひて新しき歌をうたひ地の極よりその頌美をたへまつれ……榮光をエホバにかうぶらせその頌美をもろくの島に語りつげよ』(以賽亞書四十二章四、十、十二節)

歐羅巴の聖書註解者等は何れもみな是等の聖言は地中海の島々を指すに相違ないといふが、然しこれは東又は地の極と關係ある島々である事を悟らねばならぬ。其處に神の榮光が表はれるとある。是は神が東の端なる日本に於て聖榮を表はし給ふ事の預言である。日本に於ける基督教運動の盛になる事の預言であれば、我等としては日本とその附近の島嶼に於て神の榮光の輝きが斯の如くならん事をいよく祈り求めねば

ならぬ。これ約束せられし神の聖言の一言半句も廢らずして成就せらるゝ爲である。尙驚くべき事がイザヤに依て録されて居る。

『その日エジプトの地に五の邑あり、カナンの方言をかたりまた萬軍のエホバに誓ひをたてん、その中のひとつは「日の邑」ととなへらるべし』(以賽亞書十九章十八節)

此處に「エジプト」とあるは、罪に満てる全世界を指すのである。其事は默示録十章八節にて知れる。「その屍は大なる邑の衢にあり、此邑を譬へてソドムと名け亦エジプトと名く、即ち主の十字架に懸られ給ひし所なり」。然しキリストはエジプトにて十字架に釘られ給ふたのか。否、彼はバレステナのエルサレム城外にて屠られ給ふたのである。さればエジプトとは此世の事で、即ち彼が此世の民の爲に十字架に釘られ給ふた事をかくいひあらはしたのであると見るべきである。又カナンの方言とは此世の方言の意で、五つの邑とは世界の五大強國をいふのである。元來邑とは人間

の集合せる所に對して附せられた名稱であつて、一小部分を局限すべきでなく、全體を指す。この例は默示録に見られる。彼處に「大なるバビロン」とあるは、全世界の偶像信者、僞基督の輩下の集合體を指して居るのである。されば「日の邑」とあるのも、事實一つの國家を指すものであると見るべきもので、此は即ち日の丸の國旗を掲ぐる日本にあらずして何處であらふ。日の國と稱へられ得る國は日本以外には何處にもない。支那の青天白日旗は眞似に過ぎぬ。

されば此等の數々の聖言に従つていよく我等の確信を固うせらるゝ所のものは、神が今まで日本をかへりみ給ふたに優りて、今後更に驚くべき榮を此の國に表はし給ふといふ事である。是が爲に我等は力を盡して祈らねばならぬ。今讀んだ是等の聖言は果して日本の事をいつて居るか否か、日本の現狀と比較して見れば疑はれる点がないでもないが、必ずや其約束の如く此日出る國に大なる榮を表はし給ふに相違ない。我等は此事を信じて祈りたい。今や主の再臨が近い、我等は患難の時代に殘る同胞に

對して今の中に大に警告すべきと共に、我等自身も善い加減の信仰状態では此大使命は全う出来ぬ故、我等の處世觀も終末觀も一切變つて終う程に變へられて、主を待つ者となりたい。

第七章 現今に於ける日猶關係

我國よりも猶太人の集めらるゝ預言——猶太人種存在は一の奇蹟又神の活る證——英外相バルフォアの約束と猶太人の歸國——ハーツル博士のシオン運動と無花果樹の萌芽——世界的中心的國民たる猶太人——福祉の基たる約束——猶太人と日本人との關係——基督者と猶太人——日露戰爭當時に於けるシーフ氏の援助——反猶太人運動の迷妄——赤色猶太人と正統信仰の猶太人——學術界軍事上の彼等の貢獻——獨逸のヒトラーの反猶太人スローガン——世界の金權を握る猶太人——經濟國難の際猶太人を邪魔にするな——猶太人に害を加へぬ日本——ホーリネス教會と猶太人——猶太人の爲の禱告

『萬軍のエホバかく云たまふ、視よ我わが民を日の出る國より日の入る國より救ひ出し、かれらを携へ來りてエルサレムの中に住しめん、彼らは我民となり我は彼らの神となりて共に誠實と正義に居らん』(撒加利亞書八章七、八節)

此言は頓て日出る國よりも猶太人が集めらるゝといふ預言である。是によりても我日本と猶太人との關係がある事を知るべきである。我等は聖書を信じ、聖書の中に記さるゝ預言を固く信ずる。今日迄も預言通りに萬事が運ばれて來たが、今後も預言通りに運ばれて行く事を信じて疑はぬ。聖書の預言は一点一劃も遂げ盡さずしては決して廢らない。

猶太人に就て何等の偏見なしに之を見るに、彼等は神の榮の爲に特別に選ばれし民族である事は争はれぬ。

『すべてわが名をもて稱へらるゝ者をきたらせよ、我かれらをわが榮光のために創造せり、われさきにこれを造りかつ成をはれり』、『この民はわが頌美をのべしめんとして我おのれのために造れるなり』(以賽亞書四十三章七節及び二十節)

此始の言は必ずしもイスラエル人に限らず、主の名を以て稱へらるゝ凡の民の事であるが、後の言はイスラエル人民のみに關し、彼等が特に其榮光を表はさしめんとて

造り給ふた民である事を示す。彼等猶太人は世界に於ける一の奇蹟である。奇蹟を見たくば猶太人を見よといひたい。彼等は諸國に於ける迫害虐待に堪えて今日迄保たれて來たが、神の言に記されある如くに神に従へる時には榮え、神に反ける時には衰へ、全世界に對して神の活ける證となつた。彼等程神に懲められた民はない。何千何百年間あらゆる迫害を受け、今も現に各國より虐待せられ續けつゝも、而も非常なる勢を以て繁殖して居る。大抵の人種ならかゝる苦に遇はゞ死絶えて終うのであるが、彼等は滅び失せないどころか却て愈々榮えて居る。實に不思議なる民である。

千九百十四年歐洲大戰の始まつた時、時の英國外相バルフォア氏は猶太人に戦後彼等が其本國に歸還出来るやう取計つてやると言明したが、今や毎月三千六百人宛の割で猶太人はパレスチナに歸國しつゝあるのである。二千六百年前より散され始めた此民が今非常なる勢にて其故國に歸りつゝあるとは、是も一の奇蹟である。而も神の詛を受けて全く荒廢に歸して居たパレスチナの地は近年再び雨露の恵に浴するやうに

なり、彼等の熱心なる努力と相待つて、今やエデンの園の如くに開拓せられつゝあるとの情報を受けて居る。是奇蹟に非ずして何ぞ。之をしも迷信といはゞ驚くべき迷信である。然し是は迷信でも想像でもなく、神が彼等の先祖アブラハムに約束し給ふた事を成就し給ふが爲で、預言の確實性を保證する事實である。

此處に注意すべきは、聖書に「なんぢら無花果によりて譬を學べ、其枝すでに柔かにして葉萌めば夏の近きを知る」とある言である（馬太傳第二十四章三十一節）。無花果樹とは猶太人を謂つたもので、長らく枯れ果て、居た詛はれた無花果樹が今や芽を吹き出した。即ちかの有名なハーツル博士が同胞回復の爲に起上り、所謂シオン運動なるものを起して、選民を故國に送る事に努力して居るが、聖書學者は其運動の始まつた時を無花果樹が芽を出した時だとして居る。夏とは何か、物の熟する時である。熟するとは物が最高の域に達した時である。而して今や世界は熟しきつて居る爛熟の有様ではないか。無花果樹の葉めぐれば夏の近きを知れ、即ち猶太人が目醒め出して

来たならば、此時代の終が近い事を知つて備へせよとの預言的警告である。而して彼等猶太人は今や目醒めて来て居る。民族として目醒めて来て居るといふのみならず、個人としても目醒めて来て居り、今現に續々其本國に歸りつゝあるのである。是から歸るやうになるといふのではない。此事實を知つたならば、誰か安閑として對岸の火災視して居る事が出来やう。此猶太人の動きに就て無智なるは、聖書的認識不足の然らしむる處である。

私は今現今に於ける日本人と猶太人との關係に就て述べるとして居るのであるが、私は日本人として世界中日本より良い國はないと思つて居る。私は今迄日本國民に對する神の特別の御眷顧を説いて来たが、然し猶太人との比較になれば、何といつても彼等は神の特選の民として、世界中の中心的國民となるといふ事を言ふに憚らぬ。是は聖書の光によりていふ所である。又地理的にいつても、猶太の國は亞細亞、アフリカ、歐羅巴の三大陸を結びつける中心地である。其猶太人は世界の中心的國民である。

私は日本を愛し、日本の國体を重んずる。然し聖書の光に従へばイスラエル人民が世界の中心の國民で、頓て主イエスが其處に王の王として君臨し給ひ、世界を統治し給ふ時、猶太に寶座を設け給ふといふ事を信じ又説く事を憚らぬ。我等基督者としてのみならず、各國の政治家軍人等が此事を理解し、此處に重点を置いて方針を定むるに非ずば、重大なる錯誤に陥るに決つて居る。私は何人に對しても此事を明言して憚らぬ。

私は單なる私の意見からかくいふのではなく、神がイスラエルを中心國民として選び給ふたといふ事に就ては、聖書に明言がある。今其代表的のものを見たい。

『我汝を大なる國民となし、汝を祝み汝の名を大ならしめん、汝は祝福の基となるべし、我は汝を祝する者を祝し汝を誼ふ者を誼はん、天下の諸の宗族汝によりて祝福を獲ん』(創世記第十二章二、三節)

是は神が猶太人の先祖アブラハムをカルデヤのウルより召し出し給ふた時に與へ給

ふた約束である。此約束がもし實現せなかつたならば、神は善い加減の事を仰せられた事になる。然し此預言約束は必ず成就する。神は約束を必ず成就し給ふ誠信なる御方であるが故に、彼等が世界の諸民族の爲に祝福の基となる事を我等は信じて疑はぬ。然らば其イスラエル人と我等日本人とは如何なる關係があるか。其に就ては既に人類學的に、又歴史的に深い關係のある事は述べたが、現今は如何なる關係があるか。先づ第一に我等はユダの支派より出でしイエスキリストによりて救はれて神の子となつた者である。此点からいつて我等は深い關係がある。更に我等がもつ此聖書は悉く猶太人によりて書かれたものである。未信者ならいざ知らず、少くとも我等基督者に取りては、猶太は非常に深い關係がある所である。私は所謂基督教文明なるものは元來所謂基督教文明など、世の人のいふやうな事を口にせぬが、然し事實は否む事が出来ぬ。我等が猶太の一處女マリヤより生れ給ふたイエスキリストを信じて救はれ

た事實は言消す事が出来ぬ。此一点からいつても我等はイエスの同族なる彼等猶太人を輕視する譯に行かぬ。更に又此福音は始め彼等猶太人によりて全世界に傳はつたのである。又猶太人がキリストを拒んだ爲に救が異邦人なる我等にも及ぶやうになつた事も神の攝理であるが、神は終にはイスラエルを悉く救ひ給ふと約束してある（羅馬書十一章二十五、二十六節）。

猶太人といへば我等日本人とは何の關係もないやうに考へる人もあるが、私は今先づ世間周知の事から申上げたい。日露戦争の時日本の外債に應じて大に日本を助けてくれた人は紐育のシーフといふ猶太人であつた事は人皆知る所である。今の高橋藏相が當時外債募集に出懸けられたのであるが、紐育の錚々たる銀行家であるシーフ氏は心快く承諾したのみならず、他の多の猶太人にも勧誘してくれた。これは當時露西亞に於て猶太人が非常に苦められて居たが、日本が必ず勝つであらうと信じ、此猶太人を迫害する露西亞を撃つてくれるからといふので、資金の援助をしてくれたのであ

る。日本が勝利を得た裏には此シーフ氏の援助が與つて力がある。されば日本から彼に勳章が送られたのである。然るに近頃或一部の人々の間に猶太人排斥運動をして居る者があるが、我等日本人は恩を忘るゝ民ではない。國運を賭けて戦つて居る際、資金が欠乏して困つて居た時大に助けてくれた人民を排斥するとは何事ぞ。

此猶太人反對運動は何處から起つて來たものかといへば、獨逸から起つたもので、アンチ・セミチック・ムーブメントとて猶太人を苦める事をして居る。日本の陸軍の或人々が其猶太人禍の獨逸の本を譯したりして、猶太人は世界の平和を紊す怪しからぬ人民であるなどといつて居る。無論猶太人だとして良い者ばかりではない。聖書を信ずる者もあれば信ぜぬ者もある。エホバの神を信ずる者もあれば無神論を稱へる者さへある。露西亞のトロツキの如き恐ろしい共產主義者も居るには居る。然らばとて猶太人は皆ドロツキの如き人許りだとはいへぬ。日本にさへ難波大助の如き大逆不敬漢が居つた。然らばとて日本人は皆難波大助の如き人だといはれれば、誰だつて怒る。猶太人の中にも

無神論者も居れば共產主義者も居るが、然し大多數の猶太人は眞面目に聖書を信じ、今尙メシヤ(救主)の來臨を待つて居るのである。現にエルサレムに於ては涙の壁として毎金曜其處に集り、涙と斷食を以て神よ願くば速かにメシヤを送り給へと、泣いて祈る場所が出来て居るのである。彼等の願ふメシヤは我等の現に待望んで居る再臨のキリストである。是眞面目に聖書を信ずる猶太人である。一部の猶太人が悪いからとて猶太人全体が世界の平和を紊す者、危険なる人種の如くに思ふべきではない。悪いといへば昔から同族なるイエスキリストを十字架に釘けた者さへあつたのであるが、猶太人全体が悪いやうにいふのは、余りに早計の認識不足である。我等は決して猶太人の悪口を書いた本を見たりなどして彼等を侮つたり排斥したりすべきではない。

又彼等猶太人の世界の學術界に貢献して居る事は夥しいものである。現今に於ける世界有数の學者は猶太人であるといつてもよい。昔に於ても彼等の中から様々の學者が起つたが、現今に於てはかの相對性原理のアインシュタインの如き、又佛國出身

でエルサレムにあるヘブル大學のベルグソン博士の如き、世界屈指の學者である。其他多の學者があるが、日本の學者等は直接間接に彼等に負ふ所が尠くないのである。

戦争の事に就ても、歐洲大戰の時猶太人は非常な貢献をして居る。當時英國に非常に爆發力の強い火薬の製法を教へた者は猶太人であつた。其報としてバルフォアが猶太人にパレスチナを回復する事が出来るやうに盡力せよと約束したのであると傳へられて居る。或人のいふ如く彼等は戦争の度毎金儲けするのは事實であるが、然ばとて彼等に對して憤慨するに當らぬ。彼等は其だけ頭腦がよいのである。今獨逸には猶太人は六十萬人しか居らぬが、彼是といつて虐めて居る。大戰後獨逸最初の大統領は猶太人であつたのである。然るに今や國粹社會黨の首領ヒトラーは「猶太人くたばれ、パレスチナに歸れ」といふスローガンを以て盛に反猶太熱を煽り、彼が内閣を組織すれば猶太人の財産を政府の名を以て沒收するなど、いつて猶太人を虐めて居る。されば財界の混亂を恐れて今の處ヒトラーに内閣を組織させ得ないのだといふ。猶太人は

實に金儲けの巧みなる人民で、非常に金をもつて居るが、然しそれは盗んで來たものでなし、彼等が鋭敏なる頭腦を働かせて儲けたものであるのに、其を沒收せんとするなどは實に亂暴な話である。戦争の度毎に儲けるのも事實であるが、戦争で儲けたのが悪いといふならば、何も彼等のみではない。日本の三井も三菱も然うではないか。猶太人ばかりでなく、世界の金持が皆然うである。然るに自分勝手な理屈をつけて猶太人を虐めれば、獨逸が神の祝福を受ける筈がない。然し大局から見れば虐められる猶太人には氣の毒であるが、かく苦められる事によりて彼等は其故國に歸らねばならぬやうに仕向けられて居るのだとすれば、神の攝理の中にある事を思はざるを得ぬ。神は暫く惡魔に許して、何とか早くイスラエルをパレスチナに集めやうとして居給ふかの如くに思はれる。ア、神の智と識の富は深いかなと感ずる次第である。

現在日本は猶太人と經濟的に關係があるといふ事を知つて居る者は少からぬ。現今世界の金貨の三分の二は總數千五百萬人しか居ないといふ猶太人の掌中に握られて

居るのである。米國に於ても猶太人をジュートと嫌つては居るが、彼等の前には頭が上らない。惡口をいひ乍らも御機嫌を取つて居るといふ有様である。紐育の銀行の大部分は猶太人が持主であり、大新聞の株も猶太人が大部を占め、活動寫眞、芝居の株に至る迄大部分は猶太人がもつて居る有様である。(有名なる喜劇役者チャプリンも猶太人である)。彼等は世界の金の大部分を其手の中に握つて居るのである。日本の圓の下るのも其背後には猶太人が居るといはれて居る。決して猶太人の惡口など言ふべきものでない。

既に述べし如く、日露戦争の時猶太人が金を貸してくれたが、日本のみならず諸國が其恩澤を蒙つて居る。猶太人が金を貸すやうになるといふ事は四千年も前から聖書に明白に預言してある事である。「汝の神エホバ汝に云ひし如く汝を祝福たまふべければ汝は衆多の國人に貸すことを得べし、然ど借る事あらじ、また汝は衆多の國人を治めん、然ど彼等は汝を治むる事あらじ」(申命記十五章六節)。此言の後半は未だ實現せ

られて居ないが、頓て起る事である。前半は既に成就せられて居る。モーセが此預言をしてより四千年後の今日は如何。世界中の國家で猶太人より金を借りない國はない。歐羅巴諸國も猶太人に對して彼是いふが、もし猶太人から貸した金を返してくれといはれ、ば、皆頭が上らぬ關係にある。此猶太人とは尋常な事では大刀打は出来ぬ故、ヒトラーの如く政府の手を以て其財産を没收しようなどいふ事を考へるのである。然し此猶太人を誣ふ者は個人の損であるのみならず、國家の上にも禍が来る。私は今聲を大にして我國民に警告したいのは、獨逸に起つた反猶太人運動などの尻馬に乗つて、猶太人を邪魔したり排斥したりするなといふ事である。彼等を誣ふ者は誣はれ、誣ふ國家は損害と災禍を招くに至る。今や我國は經濟國難の際、寧ろ彼等の御機嫌をこそ取るべきで、決して反抗するやうな事をしてはならぬ。私は此事を國民に呼びかけて警告したのである。

一体今迄世界の五大強國の中猶太人に害を加へないものは日本だけである。英米は

左程でないとしても、猶太人を輕蔑して居る。一例を挙げれば、何時かのオリンピックの競技の際、英國々民である或猶太人が百米突競技に於て一等賞を得た時、一英國人が「ナンダあのジューが」と罵詈雑言して悶着が起つた事がある。自分の國民になつて居る一人が勝つたのであるから、共に喜ぶべき筈であるのに、猶太人系なるを以て罵詈雑言するとは何事か。米國に於ても曾てかの自動車王のヘンリーフォードが「猶太人は米國の財界を攪亂する嫌な人種だ」といふ意味の事をいつた爲に、猶太人は結束して然らば我等はお前の處の自動車を買はぬと決議したので、遂に流石のフォードも兜を脱いだ事がある。彼等に對して下手な口は利けぬ。米國に於ては大新聞社の重なる株主は皆猶太人が占めて居る。日本に於てもジャバン・アドバタイザの持主は猶太人である事を知つて居る者は多くあるまい。兎に角彼等は頭腦のよい、侮どるべからざる民である。神は此猶太人を未だ曾て迫害した事のない我民族を用ひんとして居給ふ處に深い理由があるやうに思はれる。

最後に日本にあるホーリネス教會の猶太人に對する奉仕に就いて一言させて戴きたい。ホーリネス教會は諸教會中最も歴史の若い、小い教會であるが、其信仰に於ても其行動に於ても特色を有する教會である。然し私は今ホーリネス教會を禮賛せんとする者ではない。批評する者の見る處に任せて置く。唯私が誰にも憚らずいふのは、我ホーリネス教會は創立以來今日に至る迄猶太人の爲に幾分なりと奉仕をして來たといふ事である。即ち猶太人の爲に祈り又多少なりとも毎月献金をしたのである。是は物好きにやつて居る事ではない。聖靈がかく導き給ふたのである。猶太人の爲に献金して居る者は個人としてはあらうが、教會全體として献金して居る者は多の教會中ホーリネス教會以外にはない。我等は今も猶太人に關する智識は乏しいが、當初未だ智識の更に淺薄な幼稚なる時代に於て此事をなし始めたのは、全く聖靈の導によつたとしか思はれぬ。主がイスラエル人をいかに愛して居給ふたかは、かのサイロピニケの婦に對して、子供に與ふるパンを犬に投與ふるは宜しからずと仰せられた事によ

りても知られる。又使徒パウロは「我心に願ふ所と神に祈る處はイスラエルの救はれん事なり」といつたが、是は唯血を同うして居る同族だからとか、同郷人だからとかいふ世間一般の考からかく願つたのではない。そんな人情的の考からではなく、彼は主は此猶太人を中心として千年王國を建設し給ふといふ事を知つて居たから、イスラエルが救はれ、故國に歸る事は主イエスの再臨を早める事であると思ひ、神の世々の經綸より割出してかく祈つたのである。聖靈は此同じ思を日本のホーリネス人に移し給ふた。神が我等を恵み給ふた原因は多くあらうが、其一は微力ながらも猶太人の爲に祈り、猶太人の爲に金を献げて居る事が神の御目に止まつたからであらう。「エルサレムの爲に平安を祈れ、エルサレムを愛する者は榮ゆべし」(詩篇百二十二篇六節)との約束は眞實である。

然し更に注意すべき事は、唯現に祝福を受けて居るといふのみならず、我等が彼等選民の爲に日夜禱告して居るといふ事である。是は我群は僅か二萬人足らずの小數で

はあるが、七千萬の同胞を代表して彼等選民の爲に代願代禱して居る事である事を思ふ時に、實に嚴かに感ぜざるを得ない。

『王答へて彼等にいはん、我爾曹に告ん既に爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行へるなり』(馬太傳二十五章四十節)。

『わが弟子なるを以て小き一人の者に冷かなる水一杯にても飲まする者は誠に爾曹に告ん必ず其報賞を失はじ』(全十章四十二節)。

此二十五章は諸國民の審判に就て記した處である。諸國民が王の王、主の主の臺前に引出されて審判かるゝ時の事で、此「最微者」とはイスラエル人を指す。最微きイスラエル人を顧みて情をかけた者は此審判の時に顧みられるのである。是は何時か、主が世を審判かんとて世に降り給ふ時で、有難い事には我等は其前に携擧げられて主の許に行くのであるが、「一人は取られ一人は残さるべし」との聖言の如く残さるゝ者がある。而も「それ召ばるゝ者は多しと雖も選ばるゝ者は少し」とある如く、携へ

擧げらるゝ者は極めて小數であると思はれる。一家の中にも携擧げらるゝ者と残さるゝ者と分たれ、信者の中にも残さるゝ者が多くあらうから、無論神を信ぜぬ大多數の同胞は後に残される。而して世始まつて以來曾てないといふ大患難時代が來るのであるが、今我等が熱血を注いでイスラエルの爲に祈つて居る祈禱は、現在に於ては或程度迄しか報ひられて居らぬが、其祈禱の故に神は怒る時にも憐憫を忘れ給はずに、其患難の日に我國民の上に特別の憐憫を注ぎ給ふ事を信ずる。誰かいふ、我等は猶太人と關係なしと。未信者はイザ知らず、我等信者は聖き動機より、又我國と同胞を愛し其將來を思はゞ、此残された幾干もなき時に力を盡して選民の爲に祈るべきではないか。

第八章 日東よりの援助者

東より起さるゝ人の預言——其模型的成就アブラハム——ペルシャのクロス——最後の成就是日出る國より——此援助者は何を爲すや——何時起るや——聖徒の空中携擧——大患難時代——世界各國の軍備——ハルマゲドンの大戦争——偽基督の出現と活躍——現に見る不法の靈の活動——不法の者の具體的顯現——東よりの飛行機——日本民族の大陸に向つての發展——註釋上新しき光

今迄説いた事は過去より現在にかけての事であつたが、本章よりは全然將來に關する問題を説かんとするのである。或は今月からか、或は來年からか其は解らぬが、いづれにしても今後に屬する事で、是は私の最も力説せんと欲する處であり、是を言はんが爲に今迄の事を伏線としていつたといつてもよいのである。

『たれか東より人をおこししや、われは公義をもて之をわが足下に召し、その前にもろくの國を服せしめ、また之にもろくの王ををさめしめ、かれらの劍をちりのごとくかれらの弓をふきさらるゝ藥の如くならしむ』(以賽亞書四十一章二節)

『われ東より鷲をまねき遠國よりわが定めおける人をまねかん、我このことを語りたれば必ず來らすべし、我このことを謀りたればかならず成すべし』(以賽亞書四十六章十一節)

此「東」といふ言は二つとも前にも述べし如く、「ミヅラホ」といふ言で、日出る國との謂である。是は私の解釋ではなく、原語の意味からいふのである。抑も預言の中には模型によりて表はされるものも多くあり、此處に記さるゝ東より顯はれる人になつても、是が何者を指すやに就ては、古來註釋者間に種々に説かれて居るが、其等は皆模型的人物として見る事が出来る。第一に擧げらるゝのはアブラハムである。彼は東方カルデヤのウルより起つて西南のバレスチナに迄來たので、彼の靈的子孙は今日千々萬々、濱の砂の如くに殖え擴がつて居る。之も一の模型である。次に是はペル

シヤのクロスを指すといふ説もある。ヘルシヤは猶太より見て東北に當つて居る處で其國の王クロスがバビロンを征服した時、其地に居た猶太人を解放し、國に歸つて神殿を再建すべき事を命じ、其爲にあらゆる便宜を計り、必要なる援助を與へたので、此意味に於て彼は確に救主キリストの一の模型ともなつて居る。

然し是等は此預言の成就の型と見るべきもので、模型的には幾度も成就したが、此預言の最後の成就として表はるべきものは、東即ち日出る國より起るのである。始にはアブラハムが東の方カルデヤのウルより起り、次には更に東のペルシヤよりクロスが起つたが、今度は更に東の日出る國より起るのである。かくて此預言の大完成となるのである。而して是は一個人を指すのではなく、一民族を指す。聖書には集團又は民族全体を個人の如く記してある例がある。黙示録第七章の五人の天使はそれく各國民又は各民族を表はすものである事は既述の如くである。

然らば此東より起る援助者は一体如何なる者かといへば、第一イスラエル人民の救

の爲に祈る大使命をもつて居る者であり、第二に僞キリストに加擔して世界の平和を破る者を征服する役目を有する者である。是が日出る國より起るといふのであるから是は實に驚くべき預言である。

然らば是は何時起るかといふに、無論今後に屬する事であるが、更に詳しくいへば間もなく主イエスが再臨し給ふて我等が携擧げられた後に起る事である。主は御在世中の約束（約翰傳十四章三節）の如くに再び來り給ふ時、パウロがいつて居るやうに地上より携擧げられて空中に於て主に遇ふ者がある（帖撒羅尼迦前書四章十六、十七節）。其は主の新婦である。諸國諸族諸民諸音の中より贖ひ出され、全く潔められて凡の物に愈りてキリストを愛し、主よ來り給へと明暮主を慕つて居る新婦が携擧げらるゝのである。不信者は無論の事、有名無實の信者、肉に屬ける信者は携擧げられない。新婦たるべき者は其時榮光の體に化せられて携擧げらるゝが、此信仰と望をもつて此世を去つた聖徒等は其時墓を破つて第一の復活を受け、甦つた靈體を以

て共に携へ擧げらるゝのである。

聖徒が携へ擧げられし後、地上は大患難時代となるのである。今より述べんとする事は其患難時代に起る出来事で、新婦たる聖徒が携へ擧げられた後の事である。

『其とき大なる患難あり、此の如き患難は世の始より今に至る迄あらざりき、又後にもあらじ』(馬太傳二十四章二十一節)。

『爾わが忍耐の言を守りしにより、我もなんぢを守りて地に住む人を試みんが爲に全世界に臨らんとする試練の時に之を免れしむべし』(黙示録三章十節)。

此患難とは世界始まつて以來曾てなかつたといふ大患難で、戦争、饑饉、疫病、地震、猛獸等の爲に世界の人口の三分の二が斃されたとある。頓て世界に大戦争が起る。今各國は其爲に盛んに準備して居るではないか。千九百三十四年から三十五年にかけて大戦争が起ると、未信者でさへいつて居る。今滿洲でやつて居る位の事は是に較ぶれば何でもないやうなものである。今年は千九百三十二年だから後二三年しかない。

今や各國は血眼になつて軍備に汲々たる有様であるのは、其に向つて準備して居るのである。私が是をいふのみでない。世界の人が之を認めて居る。かゝる事をいつて嚇かすのではない。事實急速に萬事が終末に向つて進んで居るのである。或は今年か來年にも何處かで戦を始めるかも知れない。實に物騒な世の中である。

聖書には患難の時代に起る全世界に亘る大戦争の名まで出て居る。即ちハルマゲドンの戦といふ。又其場所は亞細亞、アフリカ、歐羅巴の三大陸を結びつけて居るパレスチナ附近を中心として起る戦争で、其範圍は全世界擧つて之に加はるといふ大戦争である。今に戸締りせずとも安心して寝られる時代が来るなど、いつて居る人があるが、其は其患難時代後の千年王國に入つてからの事で、其前に世の中が轉倒する程の大騒ぎが起るのである。然し新婦たる信者は其前に天に携へ擧げらるゝのである。却説、其患難時代に於て世界を攪廻すによいだけ攪廻す大人物が現はれる。其名は何といふか解らぬが、僞キリストといふ事だけは解つて居る。或は猶太人中から起る

ともいはれ、或は猶太人と異邦人との混血児だらうともいはれて居るが、いづれにしても偉大なる人物で、巧妙なる手段を以て人心を收攬し、遂に世界の覇權を握るに至るのである。猶太人は今尙メシヤの出現を待つて居るのであるから、是こそ待望めるメシヤならんと彼を歓迎し之に事へるが、猶太人は辛苦艱難して折角貯めた金を彼に絞り取られて終うのである。彼とて金銭がなければ仕事が出来ない故、之を猶太人が徴収するのである。然し更に彼は猶太人等に偶像崇拜を強ゆるに及んで始めて、猶太人は眼醒める。惟一神信仰によりて育てられた彼等は是は本物のメシヤでない気が付き、奮起して彼に反対する。其結果猶太人は此偽キリストに甚だしく虐められるのである。是は彼等に取つて未曾有の大患難である。此偽キリストは嘗に猶太人のみならず、世界の凡の民を惑はし苦める。彼の傍若無人の専横振は黙示録や但以理書に記してあるが、我等の想像以上のものがあり、實に戦慄せざるを得ざるものである。我等が主の祈に於て「我等を試探に遇はせず惡より救ひ出し給へ」と祈つて居るのは、

此來らんとする大患難時代に遇ふ事なく、此惡き者の手より救はれん事を豫しめ祈る祈禱である。

此偽キリストは不法の靈の具体的に顯現したものである。

『孺子よ今は乃ち末の世キリストに敵する者來らんと爾曹が聞き所の如く今すでにキリストに敵する者多し、是に由て今は乃ち季の世なるを我儕は知り、……誰か是謊者、イエスを云てキリストとせざる者ならずや、父と子とを拒む者は即ちキリストに敵する者なり』(約翰第壹書二章十八、廿二節)

『凡そイエスキリストを認はざる靈は神より出るに非ず、即ちキリストに敵する者なり、此者の將に來らんとする事は爾曹が聞ける所なり、今すでに世に居り』(約翰第壹書四章三節)。

此の聖言によつても知らるゝ如く、頓て來らんとする患難時代の主人公として全世界を惱ます偽キリストの子分、又先驅者ともいふべき不法の靈が、今や世界到る處に

活躍して居る。ロシアの赤化思想、反宗教運動等の如きは其である。彼等は父なる神を拒み、キリストを拒んで居る。是皆不法の靈の働である。今聖靈は之が具體的に顯はるゝのを防いで、之を壓えつけて居給ふが、聖靈が新婦なる教會を天に携擧げ給ふた後、是が人格を備へた人として具體的に顯はれて、偶像、姦淫、魔術其他あらゆる手段を以て世界の人を惑はすのである。

其時毅然として起上る者は東より來る民である。始に掲げた以賽亞書四十六章の聖言によれば、「東より鷲をまねき」とあるが、此鷲とは型で、飛行機を指す。驚くべき強力の飛行機が東の國より表はれて、僞キリストの爲に惱まされて居る民を救ふといふのである。尙其四十一章の聖言によれば、東より起る人は向ふ處敵なき勢で諸國を征服するとあり、東から西へくと大陸に向つてグン／＼伸びて行く事を預言してある。是は海軍の事ではない。大陸に向つて武力を以て發展して行くのである。而して最後に僞キリストに與する王等を抑えつけるのである。私は徒らに日本の大陸政

策を謳歌するのでもなければ、軍部に阿諛して居るのでもない。是は聖書の光なればかくいふのである。肉の考から日本が偉いからといふのではない。神の攝理の中にかくなつて居るといふのである。神は此民族をして其使命を果さしめんが爲に、過去二千五百年間外敵の侮りを受くる事なからしめ給ふた。既に朝鮮は併合せられ、今又滿洲は日本なくしては自立し得ぬのである。是れ皆攝理の中になつた事で、全能の神が此日出る國をして大陸に其手を延ばさしめんが爲に、深い聖旨の中に斯くなし給ふた事であると信じて居る。巧くやつたと喜ぶのでもなければ、國民的自負心からかゝる事をいふのでもない。神の攝理を辨へ、其爲に感謝もし又今後の爲にも祈らねばならぬ。我國は所謂基督教國ではないが、神が昔異邦人なるペルシャ王クロスを起して、旭日の東天に登るが如き勢を以て近隣諸國を征服せしめ、かくて彼をして選民イスラエルを解放せしめ給ふた如く、末の世に於ては日出る國よりイスラエルの援助者を起し、世界の平和を紊す者を罰して選民を救はんが爲に、此國民を用ひんとして

居給ふ。クロスは其型であつたのである。

此民が果して斯る事の爲に用ひられるのかと、余りの預言に疑ふ人もあらふが、神は此光を日本に於ける我等少數の者に與へ給ふた。私は今迄多の人々の註釋書を見たが、日出る國に關しては何ともいつて居ない。皆かゝる事には觸れて居らぬ。全く無智である。元來默示録などは、其他の預言も然うであるが、白人本位に見るべきものでない。然るに在來の註釋家が白人中心に偏して居る故、歐米の註釋家の目に此事が隠されたのである。默示録は全世界の人の運命に就て記してある預言であるが、猶太人を中心にして解釋すべきもので、廣い心を以て見ねばならぬ。神が我等の眼を開きて神の大經綸を示し給ふ時、我等は新しき光を以て默示録や但以理書其他を見る事が出来る。而して神が此國民を用ひんとして居給ふ事が、深き御經綸の中にある事を示さるゝ時、我等は唯驚かざるを得ない。我等は歐米の註釋者の解説を先入主とせず、參考に迄其を見るときも、白紙になつて神の前に出で、聖靈の新しき光を以て見

る事が出来るやう祈らねばならぬ。かくて新しき光を與へられ、大使命を自覺して本式に祈るやうにならねばならぬ。斯る立場にある我等は此事に就て無智であつてはならぬ。明白なる光を以て主の祈が成就せん事、即ち聖國の臨らん事を祈り、又試探に遇はせず惡より救ひ出されん事を祈るべきである。

第九章 日出る處より登る天使

廣き心を以て神の大經綸を見よ——日出る方より登る天使——キリストの模型としての日——光たる神と光の子——日に向つては戦は勝てず——西へ發展する國民——四人の天使とは四大人種——スラブ、チユートン、ラテン、アングロサクソン——他の一人の天使は日出る國の大和民族——四大民族に對しての使命——日本の軍備の役立つ時——選民の自覺と結合の爲め——十四萬四千の意義——默示録の解釋に就て——聖國を臨ませ給への祈——活る神の指圖によりて働く者たらんが爲め

『此後われ四人の天使地の四隅に立て地の四方の風を援とめ地の上にも海の上にも樹の上にも風を吹かせざるを見たり、又この他に一人の天使活神の印を持って東より登り來るを見たり、此使者かの地と海を傷ふことを許されたる四人の使者に向て大聲に呼び、我儕の神の僕の額に我儕が印するまでは地をも海をも樹をも傷ふ可らずと曰り、われ印せられたる者の

數を聞きしにイスラエルの諸の支派のうち叱せられたる者合せて十四萬四千あり』(默示録七章一節より四節迄)

先づ初に本講演のメッセーヂに就て特に讀者の注意を喚起したいのは、此問題は一民族、一國家の見地より割出しては解らないといふ事である。是は神の經綸に關する事、即ち全世界更に大にしては全宇宙に關する神の世々の御計畫の遂行に關係した事である故、廣い心を以て讀んで戴きたい。「聖書より見たる日本」と題するも、究極は主イエスキリストが再臨して此世に平和の千年王國を建設し給ふ事より割出しての話である故、此事を始終念頭に置いて貰ひたい。此問題は尙研究の余地があり、神は今後とも更に鮮かなる光を以て導き給ふと信するが、以上の見地から廣い心を以て見て戴きたい。無論一個人の靈の救、一教會の發展を無視するのではないが、本問題は一個人の人間が恵まれるの恵まれないのといふ事よりも遙かに大いなる、全世界に係はる神の大經綸に關する事故、御互に此点に充分に眼を開かれたいのである。

扱て前記の聖書の言によりて記されし出来事は前章にも記せる如く、聖徒の携擧後に於ける地上の患難時代の事である。二節の「東」といふ字は前にも述べし如く希臘語のアナトラーで、日出る所を指す。改譯には「日の出る方より」としてある。此天使は日出る所より登る天使である。世界中日出る國といはゞ我日本の他にはない。然し今先づ「日」といふ事に就て聖書の上から考へて見るに、是は頓て來り給ふ義の太陽なるキリストの型であると示してある。「そは神エホバは日なり盾なり」(詩篇八十四篇十一節)とあるは、神を物質的に擬へていはゞ、神は日の如く輝き出るもの又盾の如く我等を護る者といふのである。更に此日は表號的に見て我等の主張する新生、聖化、神癒、再臨の四重の福音に關係がある。此事は拙著「四重の福音」に詳しく記した故、此處には省略するが、此意味に於て日出る所といふ事も模型的に見る事が出来る。

聖書には神を光として表はしてある言が多くある。今其二三の例を擧げんに、

『されど我名をおそるゝ汝らには義の日いで、昇らん、その翼には醫す能をそなへん、汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん』(馬拉基書四章二節)

『神は光なり少の暗處なし此は我儕彼より聞て亦なんぢらに傳る告なり……若神の光に在が如く光の中を行かば我儕互に同心となるを得、かつ其子イエスキリストの血すべて罪より我儕を潔む』(約翰第壹書一章五、七節)

又この光の神によりて救はれた神の子等を光の子、晝の子と呼んでゐる。
『爾曹みな光の子ども晝の子どもなり、われら夜に屬る者暗に屬る者に非ず』(帖撒羅尼迦前書五章五節)

『これ爾曹が玷なく雜なく神の子となり曲れる邪なる時代に在て責べき所なからん爲なり、爾曹は此時代に在て光の如く世に顯はれ生命の道を保てり』(腓立比書二章十五節)

かく我等は光の子、日の子である。況して再臨し給ふ主に就ては明かに日であると

記してある。

『夜すでに央て日近づけり』(羅馬書十三章十二節)

此日とは義の太陽なる主イエスで、其主の再臨が近いといふのである。日出る國に居る我等日の子の群が義の太陽の出現を明暮待つて居るのは、意味深い事である。

此日といふ事に就て、迷信がいつた言草のやうではあるが、昔から日に逆つて戦した者は敗北して居る。かの對島海峡に於ける日露海戦に際し、初め日本艦隊は敵艦隊を東に迎へて撃たうとしたが、急に丁字形に北に廻つて敵艦隊の行進を止めつゝ東に廻り、東より西に向けて敵艦隊を砲撃し出した爲め、あのやうな大勝を博したといふ事を聞いて居る。是は戰略に長けた東郷大將が日に逆つて戦ふ事の不利なるに氣附かれて、かくせられた事と思はれる。昔は源平合戦の時、弓の名手那須の與市は平家の官女の捧ぐる扇の日の丸の的を射る事を避けて、扇の要を射たといふ事は人皆知る所である。是も型として見て面白いが、其は兎も角、かの元寇に就て見ても、元の國は

日出る國に矛を向けた爲に滅び、近世に於ては露西亞が東へくと、日の方に手を延ばした爲に破れたのである。我等は是等の事を思ふ時、日に向つて逆ふ事の大禁物である事を思はせられる。日を後ろにして行く時に勝利が得られる。かゝる事は迷信家のいふ事のやうであるが、今でも軍人が大砲や鐵砲を撃つ時、日の方に向つて撃つ時には照準が定りかねるといふ。之は熟練した一砲兵のいつた事である。私は是等の事を靈的に當筈めて見て意味がある事だと思つて居る。神は日出る國の民を用ひて大なる事をなさんとして居給ふのである。日本の立場は實に重大である事を悟らねばならぬ。前章にもいひし如く、光は東よりで、日が東から西へ廻る如く、我國民も西へ西へと發展するやうに、神が國民の運命を決めて居給ふやうである。

却説、前記黙示録第七章の言は實に嚴肅なる事を示して居る。四人の天使が地の四隅に立つて四方の風を援とめ、地の上、海の上、樹の上、何處にも風を吹かせぬやうにするとは、一寸穩やかになる事をいふやうであるが、是は決して平和を齎す意味

ではない。風が死んで氣味悪い無風状態になれば物は皆腐敗して終う。即ち是は世界の人間をして窒息させて終うといふ恐ろしい有様を指すのである。此四人の天使は誰であるかに就ては、從來種々の解釋があるが、米國の聖潔の傳道者であつた故ゴツドベール博士の説が最も私共に暗示を與へる。即ち彼は是を歐羅巴に於ける四大人種だといふて居る。今五大強國といふ事がいはれて居るが、是は四大人種で、第一はスラブ人種を代表するロシア人、ポーランド人、モラビア人。第二はチユートン人種を代表するドイツ人、オーストリア人。第三はラテン人種を代表するイタリア人、フランス人、スペイン人、ポルトガル人、ルーマニヤ人。第四はアングロサクソン人種を代表するイギリス人、アメリカ人である。而して此四大人種が常に此世界に於て苦情を起して居ると、ゴツドベール博士がいつて居る。東洋人がかくいふのでなく、アングロサクソンの一人なる博士がかくいつて居るのである。現に歴史を見れば其通りで、世界の何處かで平和を紊して居る。更に此四大人種は其程度に於て幾分の差はあるが

皆多少神の選民を苦めて居る。然るに神はイスラエル人を救ふ爲に、彼等と何等關係なきが如くして實は關係ある民を用ひ給ふ。是は日出る國の民で、即ち日出る方より登り來る天使を其爲に用ひ給ふのである。これ神の妙なる攝理による事である。今より二十九年前初めて此光を與へられし時、私は驚いた。ゴツドベール博士は四人の天使に就ては解釋したが、日出る所より上る天使に就ては何ともいつて居らぬ。けれどももし彼の解釋が眞であり、四人の天使が四大民族であれば、此他の天使も亦當然或民族でなければならぬ。而も此處に注意すべきは、天使は普通上より降る者の如くいはれて居るにも拘らず、此處には日出る所より登り來るとある。即ち世より表はれる天使である。尙又此天使とは英語の Angel 又は Messenger で、即ち使者である。必ずしも神の使とは限らぬ。改譯には御使とあるが、御の字をつけるべき筈でない。此四人の使者は惡魔の手先となつて世界の平和を紊し、又イスラエルの民を苦めるのであるが、日出る所の使者が顯はれて、彼等を壓へて止めさせるのである。

現に日出る處に於てはイスラエルを救ふ準備を無意識にしつゝあるのである。

日本で今盛んにやつて居る軍備は何の爲に役に立つか、知つて居る者は少いが、之が頓て役に立つ時が来るのである。日本の軍部の人はそんな事は少しも知らずにやつて居るが、聖書の光を以て見れば、是は頓て世界の平和を紊す者を壓へつける爲と、選民イスラエルを救ふ爲に用ひられるやうになるのである。此處ではイスラエルに福音を傳へて、彼等を救ひ出すといふ意味ではなくして、「我等の神の僕の額に印するまで」、四人の天使を引とめて居るのである。此印するとは世界中に散在して居るイスラエル人に神の選民たる自覺を起さしむる事で、其爲に日出る處より上る天使が用ひらるゝのである。即ち彼等が我等は神の選民である、我等の爲に神はバレスチナを先祖アブラハムに約束し給ふたのではないかと思ひ起し、かくて彼等が故國に歸還せんとするのである。無論彼等が自ら自覺する途もあらふが、日出る國の民族を用ひて他動的に自覺せしめ給ふのであると思はれる。かゝる意味に取るのが此處の適當の解

釋であると思はれる。

然らば此處に記さるゝ救はるゝイスラエルの數が十四萬四千とあるのは如何なる數であるかといふに、是は表號的の數で、十二(完全數)に十二を乗じた數で、即ち完全には或は盡くといふ意味である。十二とは組織的完全數、政治的完全數であつて、即ち統一的に、團體的に目醒めた結合をかくいふのである。今選民は各所に散在して居るが、此民に神の選民であるとの自覺を明白ならしめて結びつけ、而して其故國に歸るやうにするのが、彼等を虐めて居る歐羅巴人ではなくして、我等大和民族であるといふのである。是實に驚くべき事ではないか。

私は曾て黙示録に就て種々の註釋を讀んだが、歐米の註釋者は皆地中海を中心として之を解釋し、又白人を中心として解釋して居る故、何となく不満足を感じて居た。黙示録は唯白人のみに關係したものでなく、世界の凡の民族の運命に關係するもの故、何とか世界的の光を以て解せねばならぬと思つて居たが、當時は如何いふ

風に解釋してよいか解らなかつた。然るに今より十年前英國に行つた時、多の人に此問題に就て質問し、何故歐米の聖書學者等は地中海を中心として研究して世界的の光を以て研究せぬのかを尋ねた所、或一人の人の答に、新約聖書は全體猶太人を中心として考へねば解らぬもので、默示録も主なる部分は猶太人に關する預言であるが、其猶太人は地中海を中心として廣がつて居る故、地中海を中心とするのであるといはれ、此時幾分か光を興へられ、猶太人を中心として解釋せねば解らぬと幾分解つたが、扱て其猶太人が恢復される爲に我等日本人は何事をなすのか解らずに居たが、前記の聖言によりて我大和民族こそ彼等選民の恢復に大に關係ある事を知る事が出来た。

猶太人問題といへば對岸の火災視する者も尠くないが、是は我等が大に關係ある問題で、決して等閑にすべき事でない。私は既に過去に於て日本人が猶太人と關係のあつた事及び現在に於ても關係ある事を述べたが、更に來るべき時代には更に深き關係あり、彼等の回復に就て我民族に使命と責任がある。而して神が我等をして祈らし

め給ふ事は驚くべき事である。我等は「聖國を臨らせ給へ」と祈つて居るが、其聖國とは如何なるものかといふに、イスラエルを中心とした天國をいふ。之を知らずに祈つて居る者も多いが、我等此事を示されて祈つて居るのは、即ち彼等の爲に祈つて居る事にもなる。されば此祈禱をいかに主が悦び給ふ事であらふ。此祈禱は又主の再臨を早める事でもある。かく思ふ時に我等の祈つて居る意味が解つて來る。我等は今後も此爲に大に祈らねばならぬ。唯形式的の祈禱でなく、又人眞似のやうな祈禱でもなく、此事を明白に辨へて、此光をもつて祈るべきである。

前記の聖言には「一人の天使活ける神の印を持ちて」とある。我民族が活ける神の指圖の下に動く者となるやうに祈らねばならぬ。全國を擧げてとは行くまいが、せめて眼の開かれた少數の者にてても、此國を代表して祈る者となるなれば、いかに幸福なる事であらふ。我國より偶像が全く除かれ、我國民が神の旨に従ふ國民となり、活ける神の印を持ちて起上る者とならん事を祈るや切である。我等は此民族に神が期待して

居給ふ事を思ふ時、又此民族は將來に於て重大なる責任を負ふべき民である事を思ふ時、主よ此民を目醒まし給へと祈らねばならぬ。

第十章 日本對諸國民

イスラエル人救済の爲に四大民族を抑制する民族——將來世界的大事件の起るユフラテ河附近——志賀重昂氏の先見の明——ユフラテ河邊は世界一の石油の産地——各國の垂涎と鐵道の敷設——此附近への日本軍進出の好機を失す——日本人ベルシヤ進出の一例——四大民族ユフラテ河附近に封ぜらる——日本は諸國の戰爭より手を引く——日本と國際聯盟——世界相手の日本國民——世界の人口三分の一を殺さるゝ大戰爭——防彈チヨツキと毒瓦斯攻撃——世界大戰と日本の態度——我民族上下學つて覺醒の必要——ジエリコ提督の警告

『第六の天の使、箴を吹し時、われ神の前なる金の祭壇の四角より出る聲ありてこの箴を持る第六の天の使に語をきく、曰かの繋れて大河ユフラテの邊にある四人の使者を釋せ、乃ち四人の使者釋れたり、年月日時に至りて人の三分の一を殺さん爲に之に備しもの也、騎兵の數に萬々あり、我その數を聞き、われ異象に此馬と之に乗る者を見しが其形狀かくの如し、

彼等は火色紫色硫礦色の胸當を着、馬の首は獅子の首の如く其口よりは火と烟と硫礦いづ、此馬の口より出る火と煙と硫礦と三のものゝ爲に人の三分の一殺されたり、この馬の力量は口と尾にあり、其尾は蛇の如くにして首あり、之を以て人を傷ふ也、この禍にて殺されざる餘の人々は尙その手なす所を悔改めず、悪鬼を拜し見こと聞こと行ことを得ざる金銀石木の偶像を拜し、又その兇殺魔術姦淫盜竊を悔改めず(默示録九章十三節より二十一節)

前述の如く、日出る國の天使即ち民族が現はれて、世界の平和を紊す四大民族を抑へつける。これ何の爲かといふに、彼等の間に介在して居るイスラエル人を救濟せんが爲である。詳しい事は聖書に記されて居ないから、或は記されてあるかも知れぬが、私は未だ知らぬから今いふ事は出来ぬ。日出る國の民族が如何なる方法を以てイスラエル人を救ひ出すか、又四人の天使を抑へつけるかは知らぬが、或不思議な方法を以て此事をなすと思はれる。何處で彼等を抑へつけるかといへば、亞細亞、歐羅巴、亞弗利加大陸を結びつける邊りのユフラテ河の近所である。其處は世界的大事

件の起る所であるが、彼等は其處で行詰つて終つて、動きがとれなくなるのである。

故志賀重昂氏は其著書の中に、世界中でユフラテ河附近程石油の豊富に産出する處はないといつて居られる。されば列國いづれも此處に目をつけて居る。先年獨逸は此處を取らんと苦心したが遂に失敗に歸した。英國は歐洲大戰に於て獨領を分捕り、喜望峰からアフリカを縦斷してナイル河の上流に出で、其處から埃及通過パレスチナ迄行く鐵道敷設を企て、今や將に完成せんとして居る。更に歐羅巴方面よりはコンスタンチノーブルを通り、小亞細亞に亘る鐵道も既に完成して居る。米國はペーリング海峡を埋めて、カムチャツカ半島を通り抜けシベリヤ經由一氣にパレスチナ迄行かふといふ大鐵道の計畫を企て、居る。尙亞細亞からも此處に鐵道が通せんとして居る。滿洲鐵道の如きは發端と見るべきである。かく世界の四方から鐵道が通ずるやうになり此處は世界の中心とならんとして居る。而して此處は聖書からいつても世界の中心たるべき所である。何故皆が此處に注意するかといへば、石油が豊富に産出するからで

あるが、志賀氏がいつて居らるゝやうに、今の時代には石油がなければ何事も出来ぬ時代である故、彼處を占領する者が世界の覇權を握る者となるからである。各國は是を知つてか、知らずしてか、兎も角彼處に勢力を集中して居る事は事實である。

然らば日出る國なる我日本は之に對して何をして居るか。去る歐洲大戰の際、土耳其が獨逸に加擔した爲に英國は大に狼狽し、日本の軍部に向つて日本軍をペルシヤ灣から上陸させてバグダッドの方に派遣してくれぬかと依頼して來たが、余り遠方である爲め、其依頼に應じなかつたといふ事である。是は新聞にも出なかつた事で、私も或人を通して又聽した事であるが、もし日本の軍部の人々が聖書の光をもつて居り此日本が頓て此地方に於て起る事件に關係せなければならぬ事を知つて居たならば、是を好機に必ずや其處に兵を送つて將來の爲に適當なる根據地を占據して置いたであらふにと思はれるが、遺憾ながら彼等は聖書の光をもたぬ。惜しい事をしたものである。兎も角彼處は日本と關係のない場所ではないのである。

先達てペルシヤからトルキスタンの地方を廻つて歸つて來た或學士に遇つたが、其人の話によると、彼處に大なる事が起つて居るといふ。といふのは、印度から山越えしてペルシヤ迄通ずる鐵道を敷設する爲に、ペルシヤ政府は日本から技師を雇つて之に依託し、今頻りに工事中であるとの事である。日本の鐵道の技師の優秀なる事は夙に世界の人々の注目する處で、先に露西亞にも招聘されて行つた者がある。林子平が東京日本橋の下を流るゝ水はロンドンのテムス河を流れる水と通ずるといつて、皆から氣狂扱ひにされた事があつたが、今や不思議なる攝理の中に、日本人がかくユフヲテ方面迄も關係せんとして居るのである。

然らば一體大和民族が起つて如何するのかといへば、今年か明年か其は解らぬが、頓て來る患難時代に於て、四大民族は軍隊を繰出すが、それがユフヲテ河の附近に於て封ぜられて終ひ、東洋に足を踏む事が出来ないやうにせられる。今英國は日本を指して頻りにシンガポールに軍備をして居るとの事であるが、そんな處は我等の眼中

にない。注意すべき所はユフラテ河附近である。其處は亞細亞、亞フリカ、歐羅巴大陸の接する處の附近で、其處に於て各國軍隊が相對峙して動きがつかなくなるといふのである。其爲に神は此大和民族を用ひて抑へつけ給ふので、然らば日本が如何にして之を抑へつけるかは解らぬが、兎に角其爲に日出る國の民族が用ひらるのである。

果して然らば聖書の光を以てすれば、日本は世界の悶着から手を引くと思はれる。國際聯盟からは脱退するに違ひない。國際聯盟は行詰る。今現に行詰つて居る。日本は列國の御機嫌を取つては居られぬ。亞細亞は亞細亞人のものである。彼等は彼等であらばよい。日本は先には十三ヶ國を向ふに廻して戦ひ、今は五十何ヶ國を向ふに廻して大に戦つて居るが、これ當然の事である。彼等の言ひなりになつて居たら飛んだ事になる。彼等はキリストの政治を待たずに自分等の手に由りて世界の平和を維持せんなど、大それた事を考へて居る連中で、彼等に從つて居ては神の聖旨は成遂げら

れぬ。何を好んで彼等と妥協したり英米の鼻息を伺つたりする必要があらふ。我等大和民族には世界相手の特別の使命が與へられてあるのである。四人の天使を向ふに廻して、即ち四大民族を以て代表せらるゝ世界を向ふに廻して戦ふのは我大和民族である。かくいふのは威張つていふのではない。聖書の光に從つていふのみである。

却説、此處に注意すべきは前記の聖書の言によれば、四人の使者が釋き放たるや否や、世界の人間の三分の一は殺されるとある(十五節)。其三分の一は戦争によりて殺されるのである。「彼等は火色紫色硫磺色の胸當を着く」とあるは、近頃日本でも彼方此方で製作せられるといふ防弾チョッキの事ではなからふか。又「其口よりは火と煙と硫磺いづ」とあるは、毒瓦斯の事であるに相違なからふ。此毒瓦斯を以て世界の人の三分の一が斃さるといふのである。尙次章に於て述べんとする北の王と南の王との大戦争に際し、日本は如何なる態度をとるかといふに、暫らく第三者として之を眺めて居た後、軍隊を繰出して一路大陸を横斷し、ユフラテ河迄進出する。其處で

我民族の爲に彼等は動きが取れなくなるやうに思はれる。

此大任を果すべき我國民は自省せなければならぬ。上にありて政治を執つて居る者より庶民に至る迄目を醒さねばならぬ。私はエリヤの祈禱を思ひ出す。彼は多人數に頼まず、唯一人で萬軍のエホバに頼んで祈つたのである。我等も少數ではあるが、神が大任を與へ給ふた日本國民の爲に大に祈らねばならぬ。エリヤはかの場合神に祈るより外方法はなかつたが、我等も大に祈るより外に道がない。今こそは目醒めた者が大に祈らねばならぬ時である。かの歐洲大戰の際、英國のジエリコ提督はいつた。英國國民は上は皇帝より下一般人民に至る迄、皆悔改めて、謙つて神に祈るのでなければ、英國を此累卵の危きより救ひ出す事が出来ぬと。ジエリコ提督ならずとも、私も叫びたい。今や國の内外に於て重大危機に際會して居る我國の民が眞に目醒めて、其大任を果すに適はしき者とならんが爲に、大に警告する。我民族が目醒める事は全世界の平和に關係ある事である。更にイスラエルの恢復の爲に盡し、主イエスの來臨を

早め、平和の千年王國設立に迄影響する事である。其爲に祈るべきである。當に一教會、一教派、一團體の爲のみではない。世界の平和に關する事、神の大經綸に關する問題の爲に祈るべきである。小なる自己の問題は速かに解決し、此大なる問題の爲に身を以て禱告の使命を全うし、身を以て國難に當る者とならねばならぬ。

第十一章 北の王と南の王との戦争

我等は生やさしき非戦論者に非ず——主の再臨迄戦争はあるべき也——北の王と南の王との戦——北はスラブとチユートン——露西亞に關する預言——南はアングロサクソンとラテン——アフリカに於ける此族の勢力——ハルマゲドン大戰の端緒か——南の敗北と北の勝利——日本の傍觀——日露不可侵條約——露西亞は南に進まん——北の王の國の内亂と北軍の狼狽歸還——東の諸王とユフラテへ通ずる路——支那に關する預言——日本を盟主とする亞細亞聯合軍と其使命——武の意義と日本軍備の用ひらるゝ時——世界最後の大戦と未曾有の大患難——審判の爲に用ひらるゝ國民——來らんとする怒の日

『終の時にいたりて南の王彼と戦はん、北の王は車と馬と衆多の船をもて大風のごとく之に攻寄せ、國に打いりて潮のごとく溢れ渉らん、彼はまた美しき國に進み入ん、彼のために亡ぶる者多かるべし、然どエドム、モアブ、アンモニ人の中の第一なる者などは彼の手を免か

れん、彼國々にその手を伸さん、エジプトの地も免かれがたし、彼は遂にエジプトの金銀財寶を手に入れん、リブエ人とエテオピヤ人は彼の後に従はん、彼東と北より報知を得て周章ふためき許多の人を滅ぼし絶んと大に怒りて出ゆかん、彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん、然ど彼つひにその終にいたらん之を助くる者なかるべし』(但以理書十一章四十節より四十五節)

先づ初に申上げて置くが、我等聖潔を信ずる基督者は無論非戦主義である。然し今の世に於て之を實行しようとは思はぬ。平和の君キリストが來り給ふ迄は之を預けて置く。戦争は誰しも厭なものではあるが、聖書には「之等の事は皆あるべきなり」とあり、主來り給ふ迄は戦争は必ずあると預言してある。非戦論などいふと一寸立派に聞こえるが、我等は生やさしい平和論者ではない。今は基督教會に怪しげな平和論を唱ふる者があるから、此事を判然といつて置く。主イエスが再臨し給ふて平和の王國が建設せらるゝ時にこそ、「劍をうちかへて鋤となし、鎗をうちかへて鎌となす」と

の預言が文字通りに成就するが、其迄は戦争は何處にもあると心得置くべきである。曾て或人に私はいつた。非戦論可なり、然し君が非戦論を唱ふるならば、宜しく先づ日本の國籍を脱してからいふべきであると。さればとて私は決して戦争を禮賛する者ではない。唯、今の世に於ては止むを得ざる事であるといふのみである。世には口には非戦論を唱へながら、心にては人を憎む者もあるが、人を憎む者は人を殺す者であると聖書にある。

扱て今南の王と北の王との戦争を初め聖書に就て見たいが、前にも記した如く、一體預言は幾度にも繰返されて成就し、而して最後の成就となるのである。東より來る救拯者に就ても然うであるが、此北の王と南の王に就ても亦、既にダニエルの時代に其型を見る事が出來た。即ち當時アツスリヤの王と埃及の王とが屢々戦争をした事である。然し此預言は其だけにて終つたのではなく、尙今後に於て最後の成就を見る預言である。即ち患難の時代に教會が携擧げられし後、北の王と南の王とが別れて、

世界最後の戦争を始めるのである。北の王、南の王とは一個の軍勢を指したものでなく、又一個人を意味するものでもない。世界は此北と南に分れて大戦争するやうになるのである。北の王とは如何なる軍勢なりや、又南の王とは如何なる軍勢なりやは多くの聖書學者によりて種々論議せられて居る處であるが、私の見る所によれば、北の王とはロシア、ドイツ並びに其附近の小國の結托した軍勢で、即ちスラブ、チュートンの聯合軍であるやうに思はれる。聖書にはゴグ、マゴグ、メセク、トバルといふ言を記して、之等の北の方より來る軍勢に就ていつてあるが、ゴグとマゴグは露西亞とトバルとの間のコーカサス、メセクはモスコイ、トバルはトボルスクで、かく舊約に於て、露西亞が未だ形を成さぬ時より地名を以て呼ばれ、頓て全世界の民を亂す民であるといはれて居る。

次に南の王とはアングロサクソンとラテンとの聯合軍である。アフリカに於て先にはチュートン人種の獨逸が領地をもつて居たが、去る歐洲大戦後チュートン人種やス

ラブ人種の勢力は失墜し、獨逸は追出されて英國が其領地を取つて終ひ、今ではアングロサクソンとラテン人種が亞弗利加の中心勢力となつて居る。即ちアングロサクソンの英國は其大部分を占めて居り、次にラテンのポルトガルである。尚コンゴは日義耳に屬して居り、マダカスカルはフランスに、ソマリランド其他北方アフリカは一部はフランスに、一部はイタリに、サハラ地方はフランスといふ風で、ラテン人種の領地になり、南アフリカはラテン人とアングロサクソンの領地となつて居る。即ちアフリカはアングロサクソンとラテン人種の勢力範圍になつて居るが、是が南の王である。これが進んで行くところがあるが、今や亞弗利加大陸縦斷鐵道がバレスチナに向つて全通せんとして居るのである。

一方ロシアを中心とするスラブとチュートン人の聯合は驚くべき速度を以て具體化しつつある事は、車田氏譯の「ロシア熊とユダの獅子」を参照せられたい。北の王とはスラブの露西亞とチュートン族との聯合軍である。此北の王と南の王の衝突の機運

が愈々熱した時、遂にユフラテ附近を中心としての世界的大戦争が突發する事は聖書の預言する處である。此戦争が前記ハルマゲドンの大戦争と如何なる關係があるかは今詳しくいふ事が出来ぬが、此南北兩王の戦争がハルマゲドン大戰の序幕となるのではないかと思はれる。兎に角彼等は大に戦ふが、感謝すべき事には其時日本は傍觀的態度を取るのである。兩軍は非常なる激戦を交へるが、最近日本が通商條約を結んだアビシニヤを含むエテオピアが一時北の王に加擔するやうになり、南の王が遂に敗北し、北の王は勢に乗じて埃及に迄侵入し、埃及の金銀財寶を掠め奪ふに至る。此戦に日本は何れの方にも加擔せず、傍觀して居るが、神は此北の王と南の王とを抑制する爲に日出る國を備へ給ふのである。

此處で申上げて置きたい事は、近頃ロシアと日本と不可侵條約を結ばんとして居る事である。是は何の爲の條約かといふに、ロシアは滿洲に、日本はシベリヤに手を伸す事を牽制する爲のものであるが、多分是は結ぶやうになるかと思はれる。一體ロシ

ヤが日に逆つて戦ふ事は不自然の事で、聖書の光よりいへば、露西亞は南の方に向つて行つて、東の方に向つて來ない。東に向つて戦を挑む事は不自然の事である。先に獨逸のカイザルに尻押しされて、お人よしの露國皇帝は日本に戈を向けて大敗をなし、剩さへ自分も悲惨なる最後を遂ぐるやうになつた。日に逆つて勝てやう筈がない。日本の軍人等は如何に考へて居るか知らぬが、神は赤露が東に向つて發展する事を許し給はぬ。ロシアは日本のやうな國體には赤を打込む事が出来ぬといつて居るといふ。桃色位にはなれても赤にはなりきらぬ事を彼も見て取つたのである。ロシア熊などの爪にかゝつてたまるものでない。私は政治家でないから私のいふべき事ではないが、もし誰かが日露不可侵條約結構とばかりに、ロシアを南に向けさせて嗾けて呉れば、ロシアの赤がアフガニスタンから印度の方に廻るに違ひない。さすれば慌てるのは英國、喜ぶものは印度のガンヂー其他の連中である。余談はさて置き、兎に角ロシアは南の方に向つて行くのである。

此南の王と北の王との大會戰に當つてキヤステング・ヴォートを握つて居る者は日本である。但以理書十一章四十四節に「彼東と北より報知を得て周章ふためき、許多の人を滅ぼし絶たんと大に忿りて出ゆかん」とある。是は北の王に關する預言で、此句の解釋は人によつて違ふが、北よりの報知とは留守中ロシアに内亂が起る事であらふ。或は帝政黨が再起するの可否かは知らぬが、いづれにしても内亂の報を得て周章狼狽する。其時又東よりも報知を受ける。此東は屢いつた「ミヅラホ」で、日出る國をいふ。日本とは不戰條約を結んで居たのにと、狼狽して歸るのである。其爲にホット息ついて喜ぶのは英佛其他の南の王の軍である。然し南の王の軍隊は北の王の軍隊の爲に蹂躪せられて再起するを得ぬやうになり、此時全世界を惑はす僞キリストは起つて北の王に加擔し、之を用ひて世界の平和を攪亂する。其時起上るものは日出る國である。

さて然らば其日出る國の者は如何になるかといふに、

「第六の使者この金椀を大河ユフラテに傾けければ其水涸盡きたり、是東の諸王の路を備へんが爲なり」(黙示録十六〇十二)

此東とは他の處と同様日出る國の事である。ユフラテ河の水が涸れるとは、一體ユフラテ河は水の深さ三十尺もある河で、是は鐵道が敷設せられて自由に交通の出来るやうになる事ではあるまいか。何の爲かといへば、日出る國の諸王が自由に行く事が出来る爲である。然らば東の諸王と複數になつて居るのは何をいふか。一體今東洋に於て國家の體面を維持して居る、國家らしい國家は日本のみである。滿洲國は未だ生れたばかりであるし、シヤムは怪しいものである。東の諸王とはマサカ日本と滿洲の聯合軍とも思はれぬ。然らば支那は如何といふに、先づ支那に關する預言を見るに、主再臨し給ふ時、支那よりもキリストの處に來る者があると記してある。

「視よ、人々あるひは遠きよりあるひは北また西よりきたらん、或はまたシニムの地よりきたるべし」(以賽亞書四十九章十二節)

とある、此シニムとは支那の事である。但し此預言は千年王國の事である。此處に又別に面白い預言がある。私は之を引く事を躊躇するが、左の預言である。

「エホバ宣給はくみづからを潔くし、みづからを別ちて園にゆき、その中にある木の像にしたがひ豕の肉けがれたる物および鼠をくらふ者はみな共にたえうせん」(以賽亞書六十六章十七節)

即ち豚と鼠を食ふ民は滅びるといふのである。是は非常に暗示に富んだ聖言である。私は是を以て直様支那に關する預言であるとはいはぬが、然し私はかの國は幾つかに分れる國ではないかと思ふ。又其方がかの國の民に取つて却て幸福なる事である。私は二十年前「支那三分論」なるものを書いた事があるが、帝政復古になるか、共和政で進むかは知らぬが、多分幾つかに分裂して完全なる獨立國が出来るかと思はれる。私は敢て亞細亞モンロー主義を唱へる譯ではないが、將來黄色人種聯盟が出来、それが日出る國の司導の下に行動を取るやうになると思はれる。それが「東の諸王」

で、やがて北の王と南の王とがバレスチナ、バグダッド附近に於て戦ふ時、之を抑えつける爲に、此亞細亞聯合軍が東方より起つて其處迄一氣に押寄せて行くやうになるのだと思はれる。是は聖書の光で、之を思ふ時に實に一種嚴かな感に打たれる。而して其結果は如何。人々は戦争の爲に多く斃され、もし其日を少くせられずば遂には世界に人種子が盡きて終うのであるが、東の諸軍の出動によりて彼等は牽制せられ、人々の滅亡が減少せられるのである。此事の爲に日出る國の民族が用ひられるとは驚くべき事ではないか。神は憐憫の故に此患難の時代の戦争を短縮し給ふが、是又イスラエルの救の爲である。

武といふ文字は戈を止めると書く。漢學者の講釋のやうな事をいふが、武の目的は是である。人を殺すのが武の目的ではない。今や各國は皆戦備に汲々として居る。我日本も何億萬圓の軍事費を計上し、米國だの支那だの露西亞だのと假想敵國を設けて戦備の充實を期して居るが、目の開かれた者には其等の國でなく、頓て來るべき全世界

界の大戦争に無意識に備へて居るのだと解る。滿洲の土匪を追拂ふ位の事ではなく、ハルマゲドンの戦といふ全世界の動亂を止めしむる爲に、日本の軍備が用ひらるるやうになるのである。

『我また龍の口と獸の口及び偽の預言者の口より蛙に似る三の汚たる靈の出るを見たり、此は惡魔の靈なり、異なる跡を行ひて全地の諸王に就り彼等をして全能の神の大なる日の戦に集らしむ、視よ我盜賊の如して來らん、裸裡にて行き羞處を見るゝこと無らん爲に目を醒し衣を着る者は福なり、かの三の靈諸王たちをへブルの音にてハルマゲドンとよぶ所に集めたり』(黙示録十六章十三—十六節)

此の如き有様で全地の諸王等はハルマゲドンに集合し、恐るべき大戦争が此處に始まるが、其處へ日出る國より諸王等の聯合軍が進軍し來つて、戦を止めしめるのである。然し其處に至る迄に實に恐るべき修羅の巷を演ずる。然し患難の時代は常に戦争のみならず、戦争に續いて起る饑饉、疫病、暴き獸などによりて世界の人の三分の一

が斃されるとある。是は開闢以來未曾有の大患難の時代で、恐るべき極みである。其患難の時に起ち上つて用ひらるゝのが大和民族である。其時日出る國の聯合軍が勝利を得るのではあるが、實に悲惨な事が行はるのである。

其時東より鷺即ち飛行機が来て救ふ事に就ては、前にも述べたが、默示録にも記してある。

『我また一人の天使の日の中に立るを見たり、彼空中に飛鳥に大なる聲にて呼曰けるは、爾曹神の大なる筵に集り來り、諸王の肉、將軍の肉、勇士の肉、馬と之に乗る者の肉、および自主奴隸大と小との別なく凡の人の肉を食へ』(默示録十九章十

七、十八節)

此空中の飛鳥とは複數で記されてあるが、天使が是に命じて義しき審判を行へと號令して居る。此飛鳥とは飛行機の事で、神が強力の飛行機を用ひて恐るべき審判を執行なさしめ給ふ事は、前に以賽亞書にある「鷺」に就て述べた如くである。此審

判の爲に用ひらるゝのが日出る國の民である。

今は信ずる者は誰にても救はれ、又潔められるが、頓て神の審判が始まる。さればパブテスマのヨハネも「誰が汝等に来らんとする怒より避くべき事を告げしや」と警告した。今は救の日、恵の時であるが、頓て來らんとする怒の日、全世界に臨む大患難の日がある事を記憶せられよ。今は何人にも悔改めて主イエスを信ずれば救はれるが、其時には主の名を呼んでも救はるゝ事なく、泣いても喚いても追付かず、罪をもてる者は片端より罰せられるのである。されば我等は今我國民に對して聲を擧げて警告すべきである。其審判の時の恐るべき有様は聖書に明記してある。救はれ潔められし者は空中に携擧せられて主に遇ふ事が出来るから、嬉しい事であるが、罪を犯し偶像を拜して居る者の恐るべき審判の有様を見よ。

『地の諸王また貴人富者將軍勇士すべての奴隸すべての自主ことごとく洞に匿れ山の巖の中に匿れ、山と巖とに曰けるは、願はくは我儕の上に墜われらを掩ふて寶

座に坐する者の面と羔の怒を避しめよ、この羔の怒の大なる日すでに至れるなり、誰か之に抵る事を得んや」(黙示録六章十五—十七節)

我等は此世の権門富豪を羨やむ必要がない。神を信ぜざる貴人、富者、將軍、勇士等は皆神の怒を避けんとて、右往左往にさ迷ひ、彼方の洞や此方の巖に隠れて泣叫ぶ時が来るのである。されば審判を神の手に委ねよ。己が手を以て審判かんと思ふな。主が公平に審判さ給ふ。此は遠からず起る事なれば、主の来る迄審判する勿れ。いかなる虐待迫害に遭ふとも「聖徒の忍耐は此處にあり」。靜かに主の来るを待ち、惡魔に對して全き勝利を得て戴く爲に、主イエスよ來り給へと、愈々熱烈に祈らねばならぬ。今や時近し、主來り給ふ時、主を待望める者に恵を與へ、主に逆ふ者を審判さ、惡魔を全く征服し給ふのである。

第十二章 祭壇より出づる聲

祭壇と香壇——憚らず至聖所に入る特權——馨ばしき香は祈禱の型——祭壇下の殉教者の叫——もの凄代禱——主の要求し給ふ祈禱——香壇に尚香を盛らざる可らず——エリヤの祈禱——民に逆つて訴へる禱告——神の靈永く人と争はじ——何時迄此世は亂れ居るや——祈禱に答へての審判の執行

『第六の天の使を吹し時われ神の前なる金の祭壇の四角より出る聲ありてこの聲を持る第六の天の使に語をきく、曰くかの繫れて大河ユフラテの邊にある四人の使者を釋せ、乃ち四人の使者釋れたり、年月日時に至りて人の三分の一を殺さん爲に之を備しもの也、騎兵の數に萬々あり、我その數を聞き、われ異象に此馬と之に乗る者を見しが其形狀かくの如し、彼等は火色紫色硫磺色の胸當を着、馬の首は獅子の首の如く其口よりは火と烟と硫磺いづ、此

馬の口より出る火と煙と硫磺と三つのものゝ爲に人の三分の一殺れたり、この馬の力量は口と尾にあり、其尾は蛇の如にして首あり、之を以て人を傷ふ也、この禍にて殺れざる餘の人々は尙その手なす所を悔改めず、悪鬼を拜し見こと聞こと行ことを得ざる金銀銅石木の偶像を拜し、又その兇殺魔術姦淫盜竊を悔改めず』(黙示録九章十三—廿一節)

最後にいひたいのは「祭壇より出る聲」といふ事であるが、是非非常に大切なる問題である。此處にいふ祭壇とは金の壇で、犠牲を宰つて其上に献ぐる燔祭の壇とは異なるものである。昔の幕屋には二の壇があり、其一は牛や羊を殺して献ぐる祭壇即ち燔祭の壇である。此祭壇はイエスキリストを以て最後とする。再び犠牲を献ぐる必要がない。主は一の犠牲を以て贖の御業を永遠に完成し給ふた。是を信する者は昔献げし如き献物を何一つせすとも救はれ又潔めらるゝ。彼は牛や羊の血にあらずして、己が血を以て民の爲に贖を成遂げ給ふた故に、是以外に再び犠牲を献ぐる必要はないと、希伯來書に記してある。

今一の壇は神殿の聖所と至聖所との間の隔ての幕の前に置かれてあつたもので、これは香壇と呼ばれ、香を其上に焚いたものである。主が十字架に於て死に給ふた時上より二つに裂けたのは此隔ての幕である。昔は此幕の奥の至聖所には、祭司の長のみが年に一度だけ、犠牲の血を携へて入る事が出来たのであつたが、此隔ての幕が裂けた故、新約の我等は誰にても、常に神の前に出で、至聖所に入る事が出来るのである。主イエスの血によりて至聖所に入り、神と顔と顔を合せて相見ゆる如き親密なる交通をもつ事が出来るのである。天主教でいふ如きマリヤの仲保も要せず、直接に行ける。是は實に大なる恵又特權である。

祭壇は十字架以後最早必要がないが、香壇に至つては今も尙此上に香を献げねばならぬ。黙示録の壇とは凡て此香壇を指す。此上に絶えず焚くべき馨ばしき香は祈禱即ち信仰より出づる祈禱の型である。尙次の聖句を見られよ。

『また第五の封印を開きしとき祭壇の下に曾て神の道のため及その立し證の爲に殺

されたる者等の靈魂あるを見たり、かれら大聲に叫び曰けるは、聖誠の主よ何時まで地にすむ者等を審判せず且これに我儕の血の報をなし給はざる乎」(黙示録第六章九、十節)

此祭壇とは何か。血を以て濕された祭壇ではなくして、是は祈禱の壇である。聖徒の祈禱の献げらるゝ祈禱の壇に殉教者等の魂が集められるのである。然し管に殉教者等のみではあるまい。私の想像だに誤らずば、既に信仰の戦を戦ひ、其走るべき途程を走り盡して御國に逝いた信仰の勇士等も亦此處に居ると思ふ。然らば其處で何をして居るか。或人は死んだ靈魂はキリストの再臨迄無意識の状態の中に居るなど、飛んだ事をいふが、我等は其を信じない。聖書には彼等が主に向つて大聲に叫はつて居るとあるではないか。何と呼はつて居るかといふに、主よ何故何時まで我等の血の報をなし給はざるかと訴へて居るとある。是は忌々しいから腹癒せに彼等を酷い目に遇はせてやつて下さいと願ふ事ではない。是は代禱である。代禱といつても是はあの

人を救つて下さい、此人を恵んでやつて下さいといふやうな生優しい祈禱ではなく、神よ何故サタンを早く碎き給はざるや、早く彼を罰して下さい、オー主よ仇を復し給へといふ物凄しい祈禱である。是は生半可でいへる事ではない。眞剣なる禱告である。尙次の聖言を見られよ。

『また一人の天の使金の香鑪を持來て祭壇の側に立つ、かれ多の香を予られたり、此は寶座の前にある金の祭壇の上に之を獻げて諸の聖徒の祈禱に添しめん爲なり』(黙示録第八章三節)

天使は我等の献ぐる祈禱を馨ばしき香として添へんが爲にもつて行くのである。祈禱を形容して香といつてあるが、此香壇に尙多くの祈禱が積まれねばならぬ。是は地を這ひ廻つて居るやうな、人の前に祈つても上に昇らぬやうな祈禱ではない。眞直に天に達する祈禱でなければならぬ。主は何を要求し給ふかといふに、祈禱を要求して居給ふのであるが、わけても主の要求し給ふ祈禱は如何なる祈禱であるか。主イエス

よ來り給へ、主よサタンに勝を得給へ、國をイスラエルに還し給へ、といふ祈禱こそ
 主の最も悦び給ふ祈禱、是こそ此祭壇に盛らるべき祈禱である。此香が積まれ、ば積
 まれる程、主の再臨が早くなるのである。祈禱なくして靈魂が救はれし例なく、又祈
 禱なくして靈魂の潔められし例はない。況んや主イエスよ來り給へとの祈禱なくして
 は、いかに學者が研究したからとて、又主の再臨を信じて居たからとて、其爲に主が
 來給ふといふ事はない。然し我等は主イエスよ來り給へ、早く來りて惡き者を滅ぼし
 て全地を統治め給へと祈つて居る。祈禱には多の祈禱があるが、聖靈は我等に斯る祈
 禱をするやうに導いて居給ふ。我等は世界の信者の數から較べれば極めて僅かな人數
 に過ぎないが、聖靈は我等を捕へて斯る祈禱をなさしめて居給ふ。今こそ目醒めて眞
 劍にならなければならぬ。此壇の上の火が炎々と燃上り、香の烟が高く、昇らねば
 ならぬ。其が爲に我等は力を盡して祈らねばならぬ。異邦人の數も滿されねばならぬ
 が、此香壇に尙多の香を盛らねばならぬ。

『香の烟聖徒の祈禱に添て天使の手より神の前に昇れり、この天使香爐を執りこ
 れに祭壇の火を盛て地に傾ければ許多の聲迅雷と閃電および地震起れり』(黙示録
 八章四、五節)

祈禱が答へらるゝ事によりて人々が救はれ又潔めらるゝのみならず、祈禱が答へら
 るゝ事によりて此地上に義しき審判が行はれるのである。かくて全地が主イエスを王
 の王、主の主として崇めるに至るのである。地上に審判を請求する祈禱とは實に凄
 い祈禱であるが、エリヤも此祈禱をなした。羅馬書十一章二節に「イスラエルに逆ひて
 神に訴へけるは」(永井譯)とある。此訴へるといふのは原語で禱告といふ字である。
 英語では *Intercede against* となつて居る。イスラエルに逆つて禱告する。是は生優し
 い基督教では到底解らない事である。神の義き審判を祈る事によりて解るのである。
 然し神の義き審判を祈る時、我等の周圍の者は我等を苦め迫害する。我等は彼等の爲
 に至き愛を以て祈つては居るが、然し主イエスを侮辱する者、神の聖名を汚す者の爲

に今に審判がある。「我靈永く人と争はじ」とある如く、神は必ず審判を給ふ。我等の愛する者、我等と共に食事をして居る者の中にも審判かるゝ者があるかも知れぬ。其時は私わたくしの身内の者だから特別扱とくべつあつかひにして下さいと願つても、そんな事は許されぬ。「一人は取られ、一人は残さるべし」である。

今や世は亂れに亂れ、國と國、民と民は相反目し、あらゆる罪惡は行はれ、惡魔は跋扈して居る。何時迄も此儘なれば生れる者く、皆サタンの爲に害せられる。何時迄斯る有様にて續くべきか。主よ早く來り審判を行ひ給へ、此世を亂し騒がす惡魔を滅ぼし給へ。是が我等の獻ぐべき切なる祈禱である。祭壇より出る聲とは此祈禱である。此祭壇より出る聲の結果惡役を務むる四人の使者が釋放せられて、世界の人の三分の一を殺すのである(黙示録十九章十三節より十五節迄)。即ち永らくの間の聖徒の祈禱が現實に答へられ、主イエスが來りて新婦を携たづさへ舉げ給ふが、其後地上に大患難時代來り一大混亂大戦争が起るのである。其時此四人の使者を抑制する者は日出る國の大

和民族である事は、前述の如くであるが、兎に角神は聖徒の祈禱に答へて此地に審判を執行し給ふのである。我等は愈々熱烈に此香壇に香を盛る事を務めねばならぬ。更に一日も早く主の再臨と其義き審判の行はれん事を祈り求めねばならぬ。

本書の刊行に當り、予は左の事柄を書き添ふる事の必要を認めた。

日本の神社とユダヤの幕屋との關係につきては多の學者たちは非常の興味を以て研究して居らるゝ。例へばユダヤの祭司の胸に當るところのエボデが十二の四角な石板を張りつけたものであるのと、神官の石帯の如き、聖所と至聖所があるやうに、拜殿と奥殿とあるが如き、また參拜前に手を洗ふ所があるのは、ユダヤの幕屋と神社にのみあるが如き、供のパンと御供餅の如き、祭司と神官の着る麻の白妙の衣の如き、ユダヤの幕屋時代の祭壇と伊勢大廟の石垣が必ず天然石であるが如き、また舊約聖書にある搖祭と神官が櫛を揺り廻す事の如き、數へ切れぬほど類似の点が澤山ある。なほ神社の御輿と契約の櫃を擔ぐ事、しかも之れが水に關係があつて、渡御といふ言からして見てもヨルダン河の古事に彷彿たるものがある。我國に荒神といふものがあるが、

あれはアラ一の神でなからふか。アラ一はアラビヤ語の神で、ヘブル語のエリと同じである。エロヒムは其複數である。或神道家の説によれば神道の神も元は一柱であつて、それから多の神々が生れ出たやうになつて居るとの事である。偶像を祭つて居る神社があるが、あれは偶像教なる佛教が渡來後それにかふれて出來たものである。元來神道は天を祭る宗教であり、また靈なる神を拜む教である。それが神體を有つたり又は祖先崇拜に結び附たりした事は變態であつて、神道の墮落である。

英國の基督教界にアングロ・イスラエル主義といふものを主張する者がある。それはイスラエルの失はれたる十族は今の英國人であると説き、本書にも述べたる如く、英國の皇室はダビデ王の血統を受繼いで居ると、眞しやかに述べて居る説である。其は實に牽強附會の説で、殊に英國に居るユダヤ人などは大反對を試みて居る。今茲に其論者の説を擧げるわけには行かぬが、あんな事で其説が立つ者ならば、予はジャバニース・イスラエル主義を主張し得る尙多の材料を提供し得る者である。予の信ずる

所また調査する所によれば、失はれたるイスラエルの十族の大部分は今のユダヤ人の中に雜り、或幾分は英國人の中にも日本人のうちにも雜つた事であらふと想はれる。それは基督が再臨なし給ふ時に明白になる事と思はれる。

我等日本人も其起原を知りたく思ふやうに、英國人も聖書の中に自國を見出さうと苦心した者である。聖書に「タルシ、および島々の王たちは貢をおさめ」(詩七十二〇十)とあるが、此タルシは主に船を用ひて貿易を盛んにやる民であるから、今の英國人であると申して居るけれども、かのヨナがタルシに逃げて行つた事などから考へて見ると、これは英國でなく、地中海を中心として居つたフェニシヤ人である事が明瞭である。御氣の毒ながら聖書には英國人の事が記されて居ない。又北米合衆國人も自國をば聖書の中に見出さんと努力した。今日まで世界の教化の爲に努力したる英米の事が聖書に預言されて居ない筈がないと見るのも、尤なやうに聞こゆるが、今までそれは見當らなかつた。以賽亞書十八章一節にある「エテオピアの河の彼方なるさ

やくと羽音のきこゆる地」は米國で「丈たかく肌なめらかなる」民とは米國人である、大發見でもしたやうに説き立てる學者もあるけれども、これは果して然るや、大に研究せねばならぬ問題である。しかし日本は日出る國として明白に舊新約聖書に明示されてある。しかも其使命までも明示されてある。誰かこれを否む事が出来やうか。歐米人の中には日出る國とは日本でなからふかと思ひ附く人もあるだらふけれども、何んだか神が日本ばかりを最負にして居るやうに見ゆるので、また白人優越といふ偏見に捕はれて居るので、大胆に言出し得ずに居るのでなからふかと、思はるゝ點も無いわけではない。實は我等日本人でさへ、其使命の餘りに重大なるが爲に、果してそれが日本人に與へられたる使命であるだらふかと、信ずるに躊躇した程であつた。予は十數年前歐米を巡廻中に或人から「一人の天使の日の中に立るを見たり」(黙十九〇十七)を示され、これは日本の事でなからふかと告げられた時に、然うだと答へ得なかつたが、今は大胆に然りと答へ得る確信を神より與へられて感謝し居る者である。

曾て來朝せられたるアインスタイン博士はユダヤ人であるが、彼は日本人をばやがて世界の中心的民族となると申されたと聞いて居る。聖書の豫言によれば、日本は世界の各國を掣肘するやうになつて居る。それが第一ユダヤ人の救に關係して居るから驚かざるを得ない。現今安全地帯を探し求めて居るユダヤ人が軍備等も完備して居る日本に來りて居住するやうになり、日露戦争の時の如く、其金力をば日本の武力と合せて用ふるやうにならぬとも限らない。これは經世家の大に考慮すべき問題でなからふか。

露西亞は聖書の光を以て見れば、以西結書三十八章と三十九章にあるゴグ、マゴク、ロシ、メセク、トバルの國であるから、平和の攪亂者である。これは北の王となるもので、僞基督の手先となりてエルサレムからエチプトまで侵入する者であると預言されてある。日東の天使はどんな事があつてもこれとは提携する事はない。やがて患難の時代に日本の進出によりて、大に周章ふためき、軍を引返して自滅するとあるから

(但十一〇四四)、大陸に對して大方針を定むる日本の政治家又は軍人は此光のもとに行動すべきである。

以賽亞書四十九章に「我もろくの山を路としわが大路を高くせん、視よ人々あるはは遠きより來り或は北また西より來らん、或はまたシニムの地より來るべし」(十一、十二節)とある。シニムは今の支那であつて、大路とは高路で鐵道である。此光を以て觀る時には、亞細亞の高原に鐵道が布かれ、支那方面よりもどしどしエルサレム詣の爲に行く者がある事になるのである。日本が滿蒙に手を伸すのは當然の事で、遂に鐵道がそれに布かれて、トルキスタンからベルシャの方に出て、バグダッドからエルサレムに至るといふ順序になるのである。これは聖書から見たる大陸政策の一である。やがてバグダッドやエルサレムは商業上の中心となる。日本の商業家は早くもそこに眼をつけて今のうちより關係をつけておくやうにすべきである。パレスチナにはヘブル語が再興せられて居る。日本にもヘブル語學者があるが、其を用ひやうがなく

て困つて居る。先見の明ある人々は、大に彼等を用ふるがよい。また日本の海軍關係の人々は、ベルシヤ灣でも、紅海でも、地中海でも、何か手がかりがあるならば、後日の爲に足場を造るやうにすべきである。しかし注意しておく事は、どんな事があつても歐洲の聯盟に捕はれず、独自の立場にあつて行動する事である。

今の歐洲の平和は、一時的のものである。十一月の十一日の午後十一時に平和の調印が濟んだといふので、十一といふ不完全數から成立つた不完全なる平和である。やがてこれが破れるのは當然である。日本は此事について眼が開けて居らねばならぬ。聖書の聖數學からいへば、眞の完全は十二の數から成立て居らねばならぬ。然し何もかも整ふて居ても、平和の君なる基督が再臨し給はずば、全世界は根本から平和になるものでない。我等はこれを我等の頭の中に置いて、國家の將來を考へねばならぬ。されば人間細工の平和論などには耳を藉すべきものではない。

寧ろ我等は今「祭壇の下に曾て神の道のため及びその立てし證の爲に殺されたる者等の靈魂」が大聲を以て、「聖誠の主よ、何時まで地にすむ者等を審判せず、且これに我儕の血の報をなし給はざる乎」(黙六〇九、十)と叫んで居る事を知る時には、如何しても一日も早く、六千年間の魔王サタンを亡ぼして貰ひたいと願ふ者である。基督に全世界を治めて戴くには、此眞意を解して大に祈らねばならぬ。今までは一人でも多の人を救ひ給へと祈つて居たが、今後は神の豫定の御計畫を遂行して戴く爲に、全世界に對し、義しき審判を爲して戴くやうに祈るべきである。かかる祈は聖靈によらなければ出来なう。

かゝる祈は黙示録八章にある如く聖徒の祈であつて、天使の香の烟とともに神の御許なる祭壇の上に盛らるゝのである。此祭壇から聲が出て、其結果として日本に由つてユフラテ河に於て行詰つた歐洲の四大民族が釋き放され、人の三分の一を殺すといふ大慘劇が演ぜらるるのである。此光を以て見ると、我等は今主耶穌よ來り給へと祈つて居る事は、或意味に於ては審判主なる御方に早く來て戴きたいと祈る事で、一種

物凄いものであるが、これはどうせ起らねばならぬ事件であるから、其後に來るところの千福年の爲に、見とほしの利く信仰を以て大に祈るべきである。徒らに人情に捕はれて、主耶蘇に來て戴く事を少し延ばして戴きたいといふ事を口に出して言ふべきでなく又思ふべきでもない。今は地上の聖徒は總掛りで此祈をすべきである。しかも此事は日本の聖徒に大關係ある事であるから、此祈は日本の聖徒から多く捧げられねばならぬ。

終に日本に關する聖句を聖書中より左に引照する。

「日の出る處より日のいる處までエホバの名はほめらるべし」(詩篇十三〇三)。

「たれか日出る國より人を起し、や——我が名をよぶものを日出る國より來らしむ彼來りもろくの長をふみて泥のごとくにし陶工のつちくれを踐が如くにせん」(賽四十二〇二、二十五)

「而して日の出る所より西の方まで人々我の外に神なしと知べし我はエホバなり他に

ひとりもなし」(賽四十五〇七)

「われ日出る國より鷺をまねき遠國よりわが定めおける人を招かん我この事を語りたれば必らず來らすべし我この事を謀りたれば必らず成すべし」(賽四十六〇十一)

「西方にてエホバの名をおそれ日の出る所にてその榮光を畏るべし」(賽五十九〇十

九)

「時にイスラエルの神の榮光東よりきたれり」(結四十三〇二)

「この故に東(光の國)にてエホバを崇め海の島々にてイスラエルの神エホバをあがむべし」(賽二十四〇十五)

「日の出る處より没る處までの列國の中に我名は大ならん」(馬一〇十一)

「懼るゝなかれ我なんぢの裔を日出る處より來らせ西より汝を集むべし」(賽四十三〇五)

「彼日出る國と北より報知を得て周章ふためき許多の人を滅し絶んと大に忿りて出ゆ

かん〔但十一〇四十四〕

「萬軍のエホバかく言たまふ視よ我わが民を日の出る國より日の入る國より救ひ出さ
ん〔亞八〇七〕

「其時博士たち日出る國よりエルサレムに來り曰ひけるは……われら日出る國にて其
星を見たれば彼を拜せん爲に來れり〔太二〇一、二〕

「多の人々日出る處より西より來て……偕に天國に坐せん〔太八〇十一〕

「又この他に一人の天使活神の印を持って日出る所より登り來るを見たり此使者かの地
と海を傷ふことを許されたる四人の天使に向ひ大聲に呼り我儕の神の僕の額に我儕が
印するまでは地をも海をも樹をも傷ふ可らずと曰り〔默七〇二、三〕

「第六の使者その金椀を大河ユフラテに傾けければ其水涸盡たり是日出る國の諸王の
路を備ん爲なり〔默十六〇十二〕

Printed in Japan

昭和七年十二月卅一日印刷納本
昭和八年一月一日發行
昭和十三年十月廿七日七版發行

定價 金五拾錢
送料 金六錢

著者 中 田 重 治

發行人 中 田 重 治

印刷人 小 關 謙 六

印刷所 東京市淀橋區柏木三丁目三八六
きよめ教會印刷部

東京市淀橋區柏木三丁目三九一

發行所 きよめ教會出版部

振替口座東京一三四・〇五九番

387
77

終

